

## ビルマ古典歌謡におけるジャンル区分の形成

貝葉写本における歌謡集の分析を中心として

井上 さゆり

(日本学術振興会特別研究員)\*

### The Formation of Genre Division in Burmese Classical Songs with Special Reference to Song Anthologies in Palm Leaf Manuscripts

INOUE, Sayuri

JSPS Research Fellow

In this paper, I aim to demonstrate the basis on which certain songs were classified as Burmese classical songs or *thachingyi* (great song) and the manner in which the genre division of these songs was formed; I achieve this by analyzing the manuscripts of the songs that were written from the eighteenth to the twentieth centuries.

Songs that are classified as Burmese classical songs are referred to as *thachingyi* in Burmese or *maha gita* in Pali and are regarded as being Burmese “classical” or “traditional” songs. There are over one thousand songs listed under this category, and they are divided into approximately 20 different genres in the song anthologies publication. According to the conventional literature on Burmese classical songs, it is evident that these genres can be clearly distinguished from other genres and that almost any songs can be classified under a certain genre. This opinion is based on the fact that all song anthologies publications are segregated depending on the genres that they belong to, and thus, all songs can be categorized to a particular genre. However, these studies do not address the basis on which these song anthologies are compiled and the criteria that determine the genre of a song.

I believe that the genres in Burmese classical songs should be examined from the following two perspectives. One is the definition of certain genres and the other is the relationship between a song and its genre. Conventional

---

**Keywords:** Burma, classical songs, *thachingyi* (*maha gita*), genre, song anthology  
**キーワード:** ビルマ, 古典歌謡, 大歌謡, ジャンル, 歌謡集

\* 2007年3月末日まで、それ以後は東京外国語大学非常勤講師。

本稿が依拠する貝葉、折り畳み写本は、ミャンマー国立図書館、大学中央図書館（ヤンゴン大学内）、大学歴史研究センター図書館の許可を得て調査・撮影したものである。文化省アドバイザーのウー・キンマウンティン氏には各図書館での資料撮影許可の労を取っていただき、また上記図書館の司書の方々には写本の撮影時にご協力頂いた。ここに記して謝意を表す次第である。なお、本稿は、平成16-18年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

literature on Burmese classical songs claims that there exists a relationship between a song and its genre; according to the literature, songs determine the genre to which they will belong at the time of inception. However, after analyzing song manuscripts, I believe that the genre of a song is in fact not determined at the time of its creation.

Song manuscripts that were written from 1788 to 1849 did not revise all the songs, albeit they did make revisions to certain kind of songs or certain author's songs. By the order of King Mindon in 1870, a song manuscript was written in which the song titles were compiled and edited according to genre. This manuscript is the oldest one where song divisions according to genres are evident. Many songs that were listed in U Sa's song anthology, written in 1849 by the order of King Mindon, were not classified depending on their genres; however, in the 1870 manuscript, these songs have been categorized. Following this, all manuscripts and publications pertaining to songs that were published after 1870 began editing the songs comprehensively and compiling them according to their individual genres. Moreover, in these anthologies, the number of songs written by U Sa was considerably larger than that written by other authors; and, certain songs belonging to some genres were written only by U Sa.

Given the above, I conclude that after 1870, all songs had a certain identity and could be classified to a genre. However, some songs can be categorized under two different genres; U Sa, who is a remarkable lyricist and composer, mentioned the genre of only a part of his work. Therefore, the relationship between songs and their genres is not absolute; the genre of a song and its relationship with the song is determined when the song is edited and compiled in anthologies, and not at the time of inception.

- |                         |                 |
|-------------------------|-----------------|
| I. はじめに                 | 3 『ウー・サの文集と歌謡集』 |
| II. 大歌謡の定義              | 4 「歌謡題名数の御記録」   |
| 1 大歌謡とジャンル              | 5 『大歌謡の世界』      |
| 2 大歌謡の時代の終わり            | 6 『著名歌謡作品全集』    |
| III. 歌謡集の掲載された貝葉と折り畳み写本 | 7 「大歌謡の記録」      |
| 1 現存する貝葉と折り畳み写本         | V. 歌謡集刊本        |
| 2 貝葉の原本年と写本年            | 1 歌謡集刊本         |
| IV. 貝葉歌謡集の構成            | 2 歌謡集刊本の構成      |
| 1 『モンユエー僧正の古い楽曲集』       | VI. 結論          |
| 2 『37 精霊の歌』             |                 |

## I. はじめに

本稿は、従来のビルマ古典歌謡研究でほとんど使用されてこなかった一次資料、とくに貝葉の検討を通じて、個々の歌謡作品が「大

歌謡 (タチンジー thachingyi もしくは、マハーギター maha gita)」と呼ばれるひとつのまとまりとして成立していく過程を追い、歌謡がジャンル別に整理されるようになった経緯を明らかにすることを目的とする。その際、貝葉に記録された歌謡の性格を明らかにする

ために折り畳み写本についても参照する。

大歌謡とは、現在、ビルマのいわゆる「古典歌謡」、「伝統歌謡」として位置づけられる歌謡作品群の総称である。大歌謡に含まれる作品の多くは作者未詳である。作者名が判明しているものの制作年代を作者の活躍年に基づき見てみると、17世紀から20世紀初頭にわたっている。歌謡は、ビルマの音楽のまさに中心に位置し、西洋古典音楽においては中心をなす器楽音楽は、むしろ主流とはいえない。大歌謡は、その他の芸能である舞踊、演劇、音楽の基礎となっており、いわゆるビルマの伝統芸能の根幹を成す。大歌謡は現在でも、仏塔祭や結婚式など各種祭事や行事では必ず演奏され、人々の生活に欠かせないものとなっている<sup>1)</sup>。

大歌謡に分類される作品の数は、筆者が確認した限りでは1000篇を超える。そのうち現在でも演奏されるものは200篇ほどで、歌謡集において歌詞は残されているものの現在では演奏されず旋律が確認できない作品も多い。個々の作品の規模は様々であるが、歌詞は数行から数十行にわたり、演奏時間は数分から数十分ほどの規模である。数分で終わる短い曲が多いこともあり、実際に祭事などで演奏される場合には、数曲を連続して演奏する機会が多い。演奏は、歌手と楽器奏者から構成され、楽器は、堅琴や竹琴、バイオリンなどの比較的音量の小さい楽器が用いられる場合と、打楽器から構成される楽団(サインワイン)で賑やかに演奏される場合がある。楽器ごとに作品のレパートリーが分かれているわけではなく、多くの歌謡作品がどのような楽器の編成でも演奏しうる。

大歌謡は、歌謡集によって多少異なるが、20前後のジャンルに分けられており、それらのジャンルの多くは18-19世紀に現れたと

されてきた。本稿で述べる「歌謡ジャンル」とは、ビルマ語では「歌謡の種類(thachin myo)」「[Ministry of Culture 2001: 74の「パッピョー(patpyo)」の項目より]、「歌謡の分類(thachin ganda)」「[Hla Shwe 1994: 9]などと呼ばれるもので、英語では「歌謡の型(song type)」「[Garfias eds. 1980: 478]、「歌謡のクラス(classes of songs)」「[Williamson 2000: 42]、日本語では本稿と同様に「ジャンル」[山口・徳丸 1992: 26]と呼ばれるものである。

大歌謡に関する従来の研究は、全体像を明らかにするよりも、個々のジャンルの分析、解説に重点を置いてきた。たとえば、ビルマ文学研究の代表的なものである、ペーマウンティン(Hpe Maung Tin)の『ビルマ文学史』では、パッピョー(鼓歌)というジャンルについて次のように語られる。

パッピョーという歌謡は、ビルマとアユタヤのメロディーを半々につなぎあわせて作ったものであるらしい。パッピョーの歌謡は、アユタヤ歌謡ほどリズムが重くない。この歌謡を演奏するには環状太鼓の太鼓(パッロウン)を弾く人間が音頭をとらねばならない(アサ・ピョー)ことから、パッピョー<sup>タチン</sup>歌謡<sup>2)</sup>と呼んだと思われる[ペーマウンティン 1992: 352](括弧内原文通り。下線部筆者)。

これはジャンル説明の従来の言及のあり方の一例であるが、音楽面についての主観的且つ曖昧な説明と、ジャンル名の由来という二つの異なる次元からジャンルの定義を行おうと試みている。しかし、実際にはパッピョーは堅琴などの他の楽器で演奏される場合も多く、上記の引用中に示されている名称の由来

- 1) 大歌謡は、宮廷を中心とする場で演奏されたと考えられがちだが、ベッカーは宮廷外でも演奏されていたことを指摘している[Becker 1968: 3]。
- 2) 歌謡ジャンル名の後に、「歌謡(タチン thachin)」、「音、歌(タン than)」などと付されている場合と付されていない場合があるが、いずれの場合も指示するジャンルは同一のものである。

はこのジャンルの形式を説明してはいない。パッピョーと呼ばれる歌謡ジャンルが存在するのは事実であるが、そのジャンルとしての枠組みを固定したものと捉え、その枠組み内にみられる要素をいくつか選び出して叙述しているといえる。このような説明方法が、他のジャンルについても同様に行われている。

一方、音楽研究においては、音楽面での形式や構造の分析からジャンルの定義が試みられてきた。ベッカー (Judith Becker) は、古典歌謡の演奏に用いられる四つの調律種<sup>3)</sup>のいずれかで歌謡ジャンルは演奏されることが決まっていることを示し、弦歌とアユタヤ歌という二つのジャンルに属する作品数編に特徴的な旋律を抽出することで、ジャンルは排他的に定義されうるものということを示している [Becker 1968, 69]。

以上のように、従来の研究においては、個々のジャンルが明確に定義されうるものとして認識され、そこに帰属する作品はそのジャンルの定義に基づいた形式を持つという前提のもと、一部の作品の分析からジャンルの説明が試みられてきた。歌謡ジャンルの定義について考えていく際、いくつかの指標を設定することができる。中心となる指標は、1) 調律種、2) 拍子、3) 特定のジャンルに属する作品に頻繁に使用される旋律、4) ジャンルごとに定まった前奏、5) 後奏の五つである。さらに、ジャンルによっては、歌詞内容や歌詞の形式によってジャンルが定義されて

いるものもある。従来の研究においては、先に挙げたベッカーの研究が調律種と特徴的な旋律の二つからジャンルを捉えようとしたのと同様に、これら指標をいくつか取り出して説明することによってジャンルの説明が試みられてきた。

しかし、そもそもジャンルの説明として、絶対的な定義を持つてくるだけでは、ビルマの大歌謡のジャンルは捉えられないのではないか。実際には、上記の指標において、ジャンルごとに異なるのは4)の前奏のみであり、その他の指標は、異なるジャンルで共有される場合がある。たとえば、ある二つの作品が、それぞれ帰属するジャンルは異なるにもかかわらず、同じ旋律を共有している場合が多々みられる。また、一部の作品は、その作品が帰属するジャンルに用いられるとされる調律種で演奏されず、他の調律種で演奏されるものもある<sup>4)</sup>。それだけではなく、一つの作品が、二つのジャンルのいずれにも帰属すると解釈できるような事例も存在する<sup>5)</sup>。すなわち、Aというジャンルに特徴的な指標を用いて演奏する場合には、その作品はAジャンルと理解され、Bというジャンルに特徴的な指標を用いて演奏する場合にはBジャンルと理解される。このような作品は、解釈されるジャンルの指標を用いて演奏することによって、同じ歌詞と旋律の作品が他のジャンルの作品になりうる。以上のように、ジャンルの定義にかかわるとされる指標は複数の

- 
- 3) ビルマ音階は7音階であり、主音と音階の配置に四つの種類があり、それぞれに応じて堅琴の調弦方法が変わる。ビルマ語では「音階 (than-zin)」, 「調律方法 (hni-ni)」と呼ばれ、ビルマ音楽の主要な研究者であるベッカー [Becker 1968, 69] やガーフィアス [Garfias 1975b] によっては「旋法 (mode)」と呼ばれたものである。また、ウィリアムソンは「調律 (tuning)」, 「調律システム (tuning system)」 [Williamson 2000] などと呼んでいる。本稿では「調律種」と呼ぶことにする。
- 4) たとえば、前述のベッカーは、パッピョーというジャンルはアウピャン調律種 (現在では主音 F) で演奏されると示しているが [Becker 1969: 269], パッピョーとされる作品の中には、フニンロン調律種 (現在では主音 C), バレー調律種 (現在では主音 B) で演奏されるものもある。
- 5) 「丹前服 (ウットーヨウン)」と呼ばれる作品は、歌謡集『国家版大歌謡』 [Ministry of Culture 1969: 7, 19] では弦歌と編み歌の両方に掲載されている。つまり、弦歌の前奏を用いて、弦歌の拍子 (シンバルとカスタネットで演奏する) を用いれば、弦歌になり、編み歌の場合も同様に編み歌に常に用いられる前奏と、編み歌の拍子を用いれば、編み歌になる。旋律は同一であり、この例は、旋律からはジャンルが定義されないことを示す。

ジャンルで共有されており、また、作品によってはジャンル帰属が明確にできないものがある。ジャンルごとに定まっている前奏部分は、同一ジャンルとされる複数の作品で共通している。つまり、前奏部分は個々の作品とは関係なく演奏される部分であって、個々の作品のジャンル帰属を示すわけではない。

にもかかわらず、従来、ジャンルは固定した境界を持ち、個々の歌謡作品はいずれかのジャンルに帰属するものと捉えられてきた。その見方の背景には、19世紀末以降刊行されたいずれの歌謡集においても作品がジャンルごとに分類されていることがある。1881年から現在にかけて、12点の歌謡集が出版された。ビルマ音楽の代表的な研究者であるベッカー [Becker 1968, 69], ガーフィアス (Robert Garfias) [Garifas 1975a], ウィリアムソン (Muriel C. Williamson) [Williamson 2000] をはじめ、ほとんどの研究者が用いているのは、刊本の『歌謡浄化の書』[Ba Cho 1967 (1923)], 『大歌謡大全』<sup>ギーター</sup> [Pyone Cho 1968 (1923)], 『国家版大歌謡』<sup>マハーギーター</sup> [Ministry of Culture 1969] の3点であり、これらの歌謡集はいずれもジャンルごとに章を分け、作品をジャンルごとに整理して掲載している。また、音楽家や研究者は、この3点の歌謡集のいずれかをもって大歌謡の範囲を示してきた。しかし、歌謡集の編集過程についてはこれまで研究されておらず、大歌謡という作品群の認識が生まれた過程や、ジャンルごとに歌謡作品が整理されるようになった経緯も論じられてこなかった。

筆者は、ビルマ古典歌謡におけるジャンルについて考えていく際には、ジャンル自体の定義の問題と、個々の作品を特定のジャンルに帰属させる点を分けて考える必要があると考える。従来、この二点は分けて考えられてこなかった。また、後者の点、つまり、個々の作品とそれが分類されるジャンル区分の組み合わせについてはこれまで疑問が持たれてこなかったが、従来の研究でほとんど用いら

れてこなかった貝葉や折り畳み写本における歌謡の記述を見ていくと、作品とそのジャンルの帰属は最初から定まっていたわけではなく、歌謡集においてジャンル区分が現れる中で個々の作品がいずれかのジャンルに割り振られていったことが考えられる。そこで本稿では、貝葉と折り畳み写本を含めて、現存する歌謡集について検討することによって、歌謡集が編集されてきた過程と、歌謡集におけるジャンルの記載の仕方についてとくに注目する。

以下、第Ⅱ章では、現在の視点での大歌謡の定義について確認する。第Ⅲ章、第Ⅳ章では、歌謡集の貝葉と折り畳み写本にどのようなものが残されているかを見た後、とくに歌謡集の貝葉が記録されてきた過程を明らかにする。第Ⅴ章では、刊行された歌謡集について検討し、貝葉と刊本における歌謡の記録の仕方について考察する。

歌謡作品は、題名ではなく、歌詞の出だし部分を引用することで指示される。たとえば、「コンバウンネーミン (コンバウン朝の太陽王) で始まるパッピョー」のように呼ばれる。歌謡集における目次も、歌詞の出だし部分が示される。本稿でもその慣例に従い、作品の出だし部分を固有名詞として扱い、訳さずにカタカナで示す。

## Ⅱ. 大歌謡の定義

ビルマ語で「タチンジー」、もしくはパーリ語借用語で「マハーギーター」と呼ばれるものを、本稿では「大歌謡」と呼んでいる。ビルマ語においてはビルマ語の語彙と、それと同じ意味のパーリ語の語彙を重ねて表記することがしばしばなされる。本稿では両者を「大歌謡」と訳語を統一するが、文献からの引用部においては、「タチンジー」と「マハーギーター」のいずれが使用されているかをルビもしくは括弧書きで示す。

## 1 大歌謡とジャンル

「タチンジー」, 「マハーギータ」という呼称は, これに含まれる歌謡が現れた時から使用された名称ではなく, 後の人々が使用した言葉であると指摘されている [Hla Htut 1996: 65]。文献名に「マハーギータ」が使用されるようになったのは, 1881年の『大歌謡の世界』([Yauk n.d.], [UCL pe11170])が最初だと指摘されている [Hla Shwe 1994: 10]。

この二つの言葉の定義は, 『ビルマ音楽用語事典』[Khin Maung Nyunt. n.d.]と『ミャンマー芸能・造詣芸術事典』[Ministry of Culture 2001]には, 以下のように記されている。

『ビルマ音楽用語事典』

マハーギータ: 王宮で使用されるタチンジー。

昔の王の治世, 音楽の学問を厚遇し地位を高めるために, 尊いという意味の「マハー」を挿入して使用した。古いタチンジーをまとめてマハーギータ歌謡と呼んだ。含まれている歌謡は, 弦歌, 編み歌, 承前歌, パッピョー, アユタヤ歌謡, 夫哀歌, モン歌謡, カレン族歌謡, 積尊賛歌, ミャウ・ミン・ウ・タン フレド→タン ボウジー・タン 猿王の唸りの歌, 御船歌, 両面太鼓歌, 重疊歌, 二行詩, 主音回帰詩などである [Khin Maung Nyunt. n.d. 124] (下線部筆者。以下同様)。

タチンジー: マハーギータに入れられる歌謡の種類 [Khin Maung Nyunt. n.d. 157]。

『ミャンマー芸能・造詣芸術事典』

マハーギータ: 王宮で使用されるタチンジー, classical songs used in the palace

[Ministry of Culture 2001: 88] (英文は原文通り)。

タチンジー: ミャンマー人が代々歌ってきた弦歌, 編み歌などの歌謡, classical song [Ministry of Culture 2001: 115] (英文は原文通り)。

上記の辞書における定義からは, 「マハーギータ」と「タチンジー」は同じ歌謡作品群を指すが, パーリ語借用語である「マハーギータ」と呼びかえることによって, より高貴なものとして位置づけ直したことがうかがえる。一方で, 『ビルマ音楽用語事典』における「マハーギータ」の説明, 『ミャンマー芸能・造詣芸術事典』における「タチンジー」の説明において, これらの概念が包括するのは, いくつかの歌謡ジャンルであることが示されている。

“*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*”では, ビルマの声楽曲は数百の古典歌謡から構成され, それらは明確に分類され, その歌詞は『大歌謡』<sup>6)</sup>と『歌謡浄化の書』の二冊の刊行された歌謡集に収められているとしているとし, この二冊に収められた曲のほとんどが大歌謡 (great song) として知られている, と述べている [Garfias eds. 1980: 479]。また, 「両方の収集とも歌謡の型 (song type) によって編集されている。両方において最初の三つの歌の型は大歌謡の中心部を形作っており, それらは古い宮廷の歌であり, また古典文学の基礎でもある」と述べ [Garfias eds. 1980: 479], ここで挙げられている二冊の歌謡集が「歌謡の型」(筆者がジャンルと呼ぶもの)ごとに編集されていることが強調されている。「最初の三つの歌の型」は, 弦歌, 編み歌, 承前歌の三つのジャンルを指す。キーラー (Ward Keeler) も, 「大歌謡」がいくつか

6) 『大歌謡大全』[Pyone Cho 1968] を指すと思われる。

の「型 (types of song)」から成ることを、「(弦歌やパッピョーなどを指して) 以上の歌謡の型から成る古典的なレパトリーは、大歌謡タチンジーと呼ばれ、タチン *thahciñ* は『歌』、ジー *ci* は『偉大』を意味し、数世紀にわたって発展してきた」と述べて示している [Keeler 1998: 381] (引用中イタリックは原文通り)。

以上のことから、現在いわゆるビルマの「古典歌謡」とされる歌謡作品群は「大歌謡」という言葉で総称され、歌謡集の形で視覚的にはっきりと確認できる形を取ったものであり、その中身は、いくつかのジャンルごとに分けられて構成されているものとして、認識されていることが分かる。

## 2 大歌謡の時代の終わり

前述したように、大歌謡という言葉が初めて確認できるのは1881年であったが、その背景として、「新しい」形式の音楽が登場してきたことが指摘できる。植民地期前後に現れてきた「流行歌謡 (カーラボー *kalabo*)」と呼ばれる種類の歌謡である。「流行歌謡 (カーラボー)」という用語は、広義では流行歌という一般的な意味を持つ一方で、狭義では、大歌謡とは形式を異にした、コンバウン時代 (1772-1885) 末頃から現れた歌謡を指す。「流行歌謡 (カーラボー)」は1910年代から映画やラジオなどのメディアの中で発展していった。

この「流行歌謡 (カーラボー)」と呼ばれる形式の歌<sup>7)</sup>は、コンバウン時代には既に現れており、一方、大歌謡形式の曲は王朝以後の20世紀になっても引き続き作られていたことが指摘されている [Hla Htut 1996: 134]。大歌謡と「流行歌謡 (カーラボー)」の二つが重なり合って現れていた時期である

19世紀末から20世紀初頭にかけては、後述するように、貝葉に記録されていた歌謡が、刊本として編集されて出版されていた時期でもある。この時期に出版された、大歌謡と表題にある各種の歌謡集に、編集者自身の作品が含まれているのを見ることができる。たとえば、『大歌謡大全』[Pyone Cho 1968 (1923)]には編集者のウー・ピョウンチョー (U Pyone Cho 1878-1927) 自作のパレー調律種 (現在では主音 B) の作品が掲載されている。パレー調律種とは、コンバウン時代の後期に現れたとされるアユタヤ歌、夫哀歌、モン歌などの歌謡ジャンルに使用するとされる調律方法である。また、『王宮の大歌謡集』[Myain 1931]にはピアノ奏者ミヤイン (Sandaya Hsaya Myaing 生没年不明) のパッピョー1篇が印刷されている [Hla Shwe 1994: 31]。パッピョーは、大歌謡の中心的ジャンルとして文学・音楽研究において常に言及されるものである。ドー・ソーミャエーチィ (Daw Soe Mya E Kyi 1892-1949) は、「モーデーワー」、「ラミントタ」で歌詞が始まるパッピョー作品を作っている [Hla Htut 1996: 122]。これらの作品が作られたのは植民地時代であるが、現在、大歌謡として有名な作品となっている。

また、大歌謡の旋律を使用して「現代風」にアレンジしている例もある。マンダレー市在住の作曲家8名が共同で書いた「自由なビルマ国」という歌で、担当の一人のサー・ティン (Hsaya Tin) は、自分の担当の箇所の一部に昔の大歌謡の「サンヤータウンチュンロウン」で始まる歌から一部を選んで、新しい歌詞を付け、ビルマ音階を西洋の楽団とコルネットの音が目立つように作ったと述べている [Tin 1967: 18-19]。「サンヤータ

7) フラトゥッ (Sandaya Hla Htut) は、「大歌謡 (タチンジー)」が王の威徳を詠んだものが多いのに対して「流行歌謡 (カーラボー)」は民衆の感情を詠んだものが多く、また前者では歌詞が韻文であるのに対して、後者では押韻がところどころ見られはするものより散文体に近くなっていると述べ、「大歌謡 (タチンジー)」と「流行歌謡 (カーラボー)」の区別を主に歌詞に求めている [Hla Htut 1996: 123-131]。

ウンチュンロウン」は、ミャワディ<sup>ミンジー</sup>卿<sup>ウー</sup>・サ<sup>8)</sup> (Myawadi Mingyi U Sa 1766-1853, 以下ウー・サ) によって作られた<sup>ミンジー</sup>弦歌に属する作品である。

しかし、20世紀初頭に作られた作品の場合、大歌謡に含められる歌謡ジャンルの形式にのっとって作られていたとしても、大歌謡に入れられているものといえないものがあることが指摘されている [Hla Htut 1996: 69-70]。現在でも大歌謡形式の作曲はされているが<sup>9)</sup>、それらの作品が大歌謡に分類されることはないと考えられる。歌謡集が版を重ねる中で、大歌謡の範囲は定まっていったと考えられる。

以上見てきたように、大歌謡と呼ばれる歌謡作品群は、特定のジャンルに属する作品であり、且つ、ある時点で大歌謡として歌謡集に含められたものということができる。逆に、大歌謡については、そこに含められたジャンル名を列挙することによって説明されている。従って、ジャンルは確固とした境界を持つものと捉えられており、個々の作品はいずれかのジャンルに分類されるものとして認識されているといえる。しかし、以下見ていくように、歌謡作品群をひとつの総体として位置づけ、その作品群を特定のジャンルごとに分類する作業は、19世紀後半になってからようやく見られるようになる。

### III. 歌謡集の掲載された貝葉と折り畳み写本

#### 1 現存する貝葉と折り畳み写本

大歌謡の演奏技術は、現在に至るまで、基本的に口頭で伝授される。演奏家の多くは、それぞれの歌詞の旋律、伴奏、また伴奏のバリエーション<sup>10)</sup>を暗記している。一方、歌詞は文書として記録されて伝えられてきた。歌詞には多くの異本があるものの、楽譜を用いず口頭伝承によって歌謡を学ぶ音楽家にとって歌謡集は記憶の補助となる重要なものである<sup>11)</sup>。歌謡集については、先に述べたように、たとえば、ベッカー、ガーフィアス、ウィリアムソンをはじめ、従来の研究においては、刊本の『歌謡浄化の書』[Ba Cho 1967 (1923)]、『大歌謡大全』[Pyone Cho 1968 (1923)]、『国家版大歌謡』[Ministry of Culture 1969]などが用いられてきた。しかし、これら歌謡集がどのように編集されてきたかについては研究されていない。また、貝葉や折り畳み写本においても歌謡が残されているにもかかわらず、ミンチイ (Myint Kyi) の研究 [Myint Kyi 2001] で部分的に貝葉と折り畳み写本が用いられるのみで、貝葉と折り畳み写本についても、歌謡集を掲載したものにどのようなものが残されているのか全体像は明らかにされていない。本章では、現存する貝葉と折り畳み写本にどのようなものがあるかを示した後、原本年もしくは写本

8) ウー・サについては、「ミャワディ・ミンジー (卿)」と「ミャワディ・ウンジー (宰相)」の二通りの記載がされるが、全て「ミャワディ卿」で統一し、引用部においては「ミンジー」と「ウンジー」の区別はルビで示した。

9) 古典形式での新しい作品は今でも書かれていると、ガーフィアスが1980年の論文の中で指摘している [Garfias eds. 1980: 478]。

10) 旋律は基本的に変化しないが、まれに同一歌詞の作品でも、同じ曲とはいいがたいほど異なる旋律で演奏される場合もある。たとえば、「ターヤー (thaya)」で始まる弦歌は、環状太鼓で伴奏される旋律に、堅琴伴奏のものとの歌の旋律がほとんど異なるバージョンがある。歌詞は同じであるが、旋律が異なる例である。

11) ウィリアムソンは、歌詞に含まれるのは言葉と歌謡のリズムのパターンのみであると述べているが [Williamson 2000: 36]、リズムのパターンは歌詞には含まれず、これも教師から全て口頭で伝えられる。現在では、リズム (シンバルとカスタネットを打つ場所) は一つ一つ自分で歌詞に書き込んで学ぶのが一般的である。旋律、伴奏、様々な楽器による間奏部分、前奏部は、ガーフィアスの指摘する通り、全て口承で伝えられる [Garfias eds. 1980: 479]。

年の分かる貝葉に焦点を当てて、歌謡集を掲載した貝葉が、どのような経緯と構成で編集されているかについて検討する。

分析の対象とする17点の貝葉と18点の折り畳み写本は、筆者が2004年11月から2005年3月にかけて、ミャンマー国立図書館(National Library: NL)、大学中央図書館(Universities Central Library: UCL)<sup>12)</sup>、大学歴史研究センター(Universities Historical Research Centre: UHRC)において確認したもの、及び、元国立図書館長のウー・キンマウンティン(U Khin Maung Tin: UKMT)氏所蔵のものである。筆者が調査した貝葉と折り畳み写本は、次節2の表1と表3に示した。この調査では、従来からその存在が指摘されていた<sup>13)</sup>『著名歌謡作品全集』[NL 3149]を確認することができた。さらに、1849年に編集されたウー・サの名高い作品集の貝葉写本として、ミインチィ[Myint Kyi 2001]などによって利用されてきたミャンマー国立図書館蔵の『ミャワディ<sup>ミンジー</sup>卿が歴代の王に書き贈った文集』[NL kin351]がこれまで知られていたが、同作品集の貝葉写本が大学歴史研究センターと大学中央図書館にも所蔵されていることを確認した。国立図書館所蔵の貝葉[NL kin351]は写本年が不明であるが、大学歴史研究センター所蔵の貝葉[UHRC 465]は写本年が1883年、大学中央図書館所蔵の貝葉[UCL pe42332]は写本年が1902年であった。フラッシュエ(Hla Shwe)は、ウー・サの作品集として作成された貝葉について、国立図書館と大学中央図書館に所蔵されているもの以外に、ウェッマスッ郡長(Wetmasut wundauk、『著名歌謡作品全集』編集者、後述)が写した貝葉があるはずだが所在が不明となっていると述べている[Hla Shwe 1994: 82]。この貝葉はウェッマスッ郡長の孫であるダゴン・キンキンレー(Dagon Hkin Hkin Lay)に

受け継がれ、それが刊本[Zwe Sape Press 1967]の底本であると、フラッシュエは述べている[Hla Shwe 1994: 79]。これは、筆者が大学歴史研究センター図書館で確認した貝葉[UHRC 465]ではないかと考えられる。筆者は同図書館の目録で確認して撮影したが、同行した元国立図書館長の、とくに歌謡関係の貝葉の所在に詳しいウー・キンマウンティン氏もこの貝葉について把握していなかったため、これが「所在不明」となっていたウェッマスッ郡長が写した貝葉ではないかと考えられる。しかし、大学歴史研究センター所蔵の貝葉と刊本では異同もあり、判断は困難である。その他、従来の研究の中で刊本でのみ言及されてきた『大歌謡<sup>マハ・ゴウ</sup>の世界』の貝葉[UCL pe1170]が大学中央図書館に所蔵されていることが明らかになった。さらに、その他にも、歌謡集が掲載された貝葉と折り畳み写本を数点確認することができた。

以上、筆者が調査した貝葉と折り畳み写本をデジタル撮影し、今回の分析に用いた。撮影前には全ての頁をレモンガラス油で清掃したが、中にはもともと判読が困難な貝葉や破損した部分などが含まれるものもあり、一部判読できない箇所が残された。また、文字の正書法が一定していない時代のものであるため、同じ用語に様々な綴りが用いられていることも加わって、貝葉中での綴りがはっきりと確認できない箇所もあった。本稿で必要箇所を訳出する際には厳密に画像をチェックし、不鮮明な箇所には「(不鮮明)」と記載したが、中には筆者が誤読している箇所が残されている可能性も否めない。

## 2 貝葉の原本年と写本年

貝葉の作成年の判断の方法について、まず述べておく。貝葉には、最初に作成された「原本」と、それを後に筆写した「筆写本」がある。従って、「筆写本」が複数作られている

12) ヤンゴン大学構内に所在。

13) [Hla Shwe 1994: 68-78]。

場合も多々ある。貝葉が最初に作成された年月日については序文の中に記載され、写本である場合には写本年が結語に書かれている場合が多い。たとえば、『ミャワディ卿<sup>ミンジー</sup>の歌謡、四音朗詠詩、季節詩、戯曲の台詞集』[UCL pe42332]の場合、序文の中に、この貝葉の作成を命じる王の勅令が「緬曆 1211 年ワーガウン月白分<sup>14</sup>5 日(西曆 1849 年 7 月 24 日)」[UCL pe42332: kaa(k)]に出されたことが明記され、貝葉末尾に「緬曆 1264 年トーダリン月白分 8 日水曜日(1902 年 9 月 9 日水曜日)に書き写し終えた」[UCL pe42332: nyan(k)]と記載されていることから、この貝葉は筆写本であり、1902 年 9 月 9 日に書き写し終えたこと、原本年は 1849 年の勅令が出された後に作られたことが分かる。この例のように、「何年何月何日に書き写し終えた」と貝葉中に記載されている場合は、その貝葉が筆写本であるとの判断が可能である。しかし、筆写本全てが、筆写本であることを明記しているかどうかは明らかではない。また、序文や結語がない貝葉もあることから、貝葉によっては原本か写本か判断が困難なものもある。作成年しか記載されていない貝葉は原本である可能性が高いが、決め手となる記述様式は明確でないため、判断は困難である。

貝葉の題名については、写本が作られた時に記されたものではなく、後から図書館での整理のために書かれたと思われるものもあった。貝葉は、鉄筆で刻まれて文字が記載されるため、ペンなどで題名が記載されている場合は、後から記載されたものと比較的容易に判断できる。表 1 と表 3 に示した題名のうち、後から記載されたと考えられるものについては、題名欄に\*印で示した。表の掲載順は、原本年もしくは筆写年の古いものから始めたが、たとえば、ウー・サが編集した原本年 1849 年の貝葉 3 点([UHRC 465], [UCL pe42332], [NL kin351])のように、同一

歌謡集に複数の写本がある場合は続けて掲載した。また、一束の貝葉に二つの歌謡集が収められているものもあり(表 1 の 1 と 2, 11 と 12), それらについては原本年にかかわらず続けて記載した。また、これら一束になった貝葉については、中に収められた歌謡集 1 点ごとに貝葉 1 点として数えている。

表 1 に示した通り、歌謡集を掲載した貝葉は 17 点が確認できる。原本年を確認できる貝葉のうち最も古いのは 1788 年の『モンユエー僧正の古い楽曲集』[NL 3149], 最も新しいのは 1881 年の『大歌謡の世界』[UCL pe11170]で、原本間の年代差は 93 年間である。写本年については、確認できる中で最も新しいものは 1917 年の『著名歌謡作品全集』[NL 3149]と『モンユエー僧正の古い楽曲集』[NL 3149]であり、この 2 点は同じ貝葉の束に掲載されている。18 世紀末から 20 世紀初頭にかけての約 130 年間の間に歌謡集の編集及び筆写が貝葉においてなされたことが分かる。

原本年もしくは写本年の分かる歌謡集を年代順に並べると表 2 のようになる。

表 2 からは、1788 年から 1917 年にかけて、数年から数十年おきに歌謡集が貝葉に記録されていることが分かる。表 2 中に示した 1893 年<sup>マハーギーダ</sup>『大歌謡の世界』[UCL pe11170]は、この写本年の 12 年前の 1881 年に刊行された最も古い刊本であると伝えられている(後述)。1881 年から 1917 年頃の期間は、貝葉と刊本の両方が作成されていたことが分かる。

一方、折り畳み写本については、表 3 に示した通り 18 点が確認できる。折り畳み写本は全て、原本年、筆写年共に記載されていなかった。本文中に作品が作られた年が書かれている場合は、それらを参考年の欄に記入した。表 1 と同様に、題名が後から書かれたと思われる場合には\*印で示した。また、折り畳み写本を作成した者の名前が記されてい

14) 新月から満月までの半月の期間。

表 1. 歌謡集を掲載した貝葉

	題名	編者	原本年	筆写年	頁数 <sup>15)</sup>	請求番号
1	モンユエー僧正の古い楽曲集	モンユエー僧正	1788	1917	dhay(w)-phii(k)	NL 3149
2	著名歌謡作品全集	ウエツマッ郡長	—	1917	ka(w)-dhe(k)	
3	37 精霊の歌	ウー・サ	1820	1820	nuu(w)-phaa:(k)	NL tin69
4	後乗り歌*	—	1822	—	zi(w)-zhaa(k)	NL taung620
5	12 の季節の合唱歌*	—	—	1869	ka(w)-kuu(k)	NL barnard603
6	ミャワディ町領主 <sup>16)</sup> 軍司令官が整理した 37 精霊の歌。宰相パデータヤーザーの詠んだ 37 精霊の歌 <sup>17)</sup>	ウー・サ	—	1876	ka(w)-ghaw(k)	NL barnard1604
7	(表紙なし) (ミャワディ 卿文集)	ウー・サ	1849	1883	ka(w)-nyo(k)	UHRC 465
8	ミャワディ 卿の歌謡、四音朗詠詩、季節詩、戯曲の台詞集	ウー・サ	1849	1902	ka(w)-nyan(k)	UCL pe42332
9	ミャワディ 卿が歴代の王に書き贈った文集	ウー・サ	1849	—	ka(w)-Than(k)	NL kin351
10	歌謡題名数の御記録* <sup>18)</sup>	—	1870	—	ka(w)-khuu(k) <sup>19)</sup>	NL barnard1076
11	大歌謡の世界 <sup>20)</sup>	ウー・ヤウツ	1881 <sup>21)</sup>	1893	ka(w)-ngi(k)	UCL pe11170
12	37 精霊を指示する精霊歌 <sup>22)</sup>	ウー・サ	—	1893	ngi(k)-she(k)	
13	精霊歌	—	—	—	ka(w)-kaa:(k)	NL taung1773
14	(題名なし) (弦歌) <sup>23)</sup>	—	—	—	gu(w) <sup>24)</sup> -ngan(w)	UKMT pe1
15	第 1 巻、大承前歌、中承前歌、小承前歌、精霊承前歌の記録	—	—	—	ka(w)-gi(k)	UKMT pe2
16	大歌謡の記録*	—	—	—	ka(w)-gi(k)	NL tin68
17	インワ王時代に書かれた女性を思う大承前歌 <sup>25)</sup>	—	—	—	ka(w)-khaa(k)	UKMT pe3

[出典] 上記各貝葉より筆者作成。

- 15) 頁数は最初と最後の頁記号で示した。貝葉の頁は、ビルマ文字によって示される。1 枚の貝葉の両面をそれぞれ腹 (wun)、背 (kyaw) と呼び、背側から頁は書き始めるが、頁を示す文字は腹側の左端に記載される。本稿では、腹側と背側をそれぞれ (k)、(w) と示し、たとえば「ka(w)」と示した場合は「ka」という貝葉 1 枚の背側を示す。
- 16) 本稿では「町領主」と訳した「ミョウザー (myo za:)」と、「村領主」と訳した「ユワーザー (ywa za:)」は、該当地域の税などの収入を得る身分を指し、実際にその地域に居住しているわけではない。
- 17) 独立した表紙はなく、この題名は本文最初の頁の右空白部分に記載されている [NL barnard1604]。
- 18) 所有者のウー・キンマウンティン氏が、貝葉序文の記載「歌謡題名数の御記録」[NL barnard1076: kaa(w)] に基づき、表紙にこの題名を記載した。
- 19) この部分の貝葉の右半分が欠けているが、ここには結語部分が記載されていることから、頁はおそらくここで最後である。
- 20) 独立した表紙はなく、本文の頁の右空白部分に記載されている。
- 21) 刊本の初版年とされている年を記入した。
- 22) 『大歌謡の世界』の一部として書かれたもので、頁途中に「37 精霊を指示する精霊歌」と書かれている [UCL pe11170: ngi(k)]。
- 23) 最初のページが破損しており、また 142 曲目からページが残されておらず、年代は確認できなかった。
- 24) 貝葉の頁記号の記載箇所が破損しているが、次の頁番号から推察した。
- 25) 独立した表紙はなく、本文の頁の右空白部分に記載されている。

表 2. 歌謡関連貝葉写本の原本年, 写本年

1788	1800	20	30	40	50	60	70	80	90	1900	10	20
1788 (原本年) 『モンユエー僧正の古い楽曲集』												
1820 (原本年) 『37 精霊の歌』												
1822 (原本年) 『筏乗り歌』												
1849 (原本年) 『ウー・サの文集と歌謡集』 (貝葉 7, 8, 9 の統一名称)												
1869 (写本年) 『12 の季節の合唱歌』												
1870 (原本年) 『歌謡題名数の御記録』												
1876 (写本年) 『ミャワディ町領主軍司令官が整理した 37 精霊の歌』												
(刊本 1881 『大歌謡の世界』)												
1893 (写本年) 『大歌謡の世界』												
1917 (写本年) 『著名歌謡作品全集』												
『モンユエー僧正の古い楽曲集』												

【出典】表 1 より筆者作成。

表 3. 歌謡集を掲載した折り畳み写本

	題名	参考年	請求番号
1	諸々の大承前歌集	1853	NL pu104
2	37 精霊の歌*	1860 <sup>26)</sup>	NL pu101
3	諸々の大歌謡の折り畳み写本	1881	NL pu103
4	王女をエメラルドの揺り籠に乗せる吉祥の四音朗詠詩, 王宮揺り籠歌, 銅鼓アユタヤ歌, 威徳を詠んだ歌各種	1881 <sup>27)</sup>	NL pu112
5	舟歌集*	1881 <sup>28)</sup>	NL pu129
6	題名なし (筏乗り歌他掲載)	—	UKMT pu765
7	ミャワディ町領主 卿の詠んだ 37 精霊の歌 (表紙のみ)	—	NL pu922
8	軍司令官ミャワディ卿が詠んだ諸々の歌謡の折り畳み写本	—	NL pu119
9	ウェータンダヤー舟歌	—	NL pu128
10	大承前歌集の折り畳み写本	—	NL pu97
11	タウンロウンフマイン御舟官更らに与えた歌謡	—	NL pu142
12	大臣, シンゲートー枢密官, ウー・ワインらの詠んだパッピョー, カレン族歌謡, 御船歌 <sup>29)</sup>	—	NL pu144
13	諸々の承前歌の折り畳み写本	—	NL pu168
14	パッピョー 16, 緩慢歌 1, アユタヤ歌 1, ダウエー語歌謡 2, テインガー氏歌謡 1, 御船歌 2 (数が記載されている)	—	UKMT pu221
15	伝統的に教授する演奏。古い弦歌, 編み歌, 承前歌集	—	UKMT pu222
16	大歌謡	—	UKMT pu223
17	パッピョー歌謡	—	UKMT pu775
18	季節詩, 四音朗詠詩, 釈尊賛歌 <sup>30)</sup> , タヤー音, テー音 <sup>31)</sup> の歌謡*	—	UCL pbk0577

【出典】筆者作成。

- 26) 10 頁に「緬曆 1222 年ピャードー月白分 17 (不鮮明) 日 (西曆 1860 年 12 月)」という走り書きがあるが、この写本の筆写年かどうかは不明。白分 17 日 (黒分 3 日) の場合は、西曆 1860 年 12 月 29 日。
- 27) 序文に、「(前略) その年 (1243 年), ナドー月白分 10 日 (西曆 1881 年 11 月 30 日) の素晴らしい吉祥の時間に、エメラルドの揺り籠に乗せる儀式において、アッガマハーテナーパティ軍司令官レーカイン町領主大臣ミン・タトートゥダグンマ・マハーテットーシェーが詠み贈ったエメラルドの御揺り籠に乗せる吉祥の四音朗詠詩, 王宮揺り籠歌, 銅鼓アユタヤ歌, 御威徳を詠んだ歌各種」とある。1243 年 (西曆 1881 年) がこの折り畳み写本自体の筆写年かどうかは不明。

るものがなかったため、作者名欄は付さなかった。

表3に示した折り畳み写本18点の表題を見ると、貝葉の表題に比べて、歌謡ジャンルの名称が細かく記載されていることが指摘できる。貝葉が量的にもまとまった形の歌謡集を意図して作られ、対して折り畳み写本は、メモとして個々の歌謡から選んだものを記載したことが推察される。従って、歌謡集の編集過程を見ていくには貝葉が適当であるので、次章では貝葉を中心に検討する。

#### IV. 貝葉歌謡集の構成

折り畳み写本には序文や結語、作成年などが記載されておらず、書物というよりはメモのように使用されていることに対して、貝葉の場合はひとつの文書として、作成年が記載され、編集の意図がはっきりしているものが多く見られた。以下では、原本年もしくは写本年の記載のある貝葉6点を中心に、これらの貝葉が作られた経緯と歌謡ジャンルの記

載の仕方について検討していく。

#### 1 『モンユエー僧正の古い楽曲集』[NL 3149]

17世紀のタールン王の時代(Thalun 在1629-48)に、既に歌謡の記録がなされていたことがこれまで指摘されているが<sup>32)</sup>、現在確認できる最古の歌謡集は、コンバウン時代のボードーパヤー王治世(1781-1819)の1788年に編集されたといわれる[Hla Htut 1996: 65]、モンユエー僧正(1766-1834)による『モンユエー僧正の古い楽曲集』である[Myin Kyi 1960: 381-382]。図1は、この題名が刻まれた表紙である。

図1の中央に「モンユエー僧正の古い楽曲集(Monywe hsayadaw she ti-gyek than-zu)と表題が書かれており、左上には「dhay頁から始まり phii 頁で終了。第12巻」と書かれている。この貝葉写本は、後述の『著名歌謡作品全集』と同じ貝葉の束に続けて掲載されており、『著名歌謡作品全集』が「第11巻」に相当する部分までで構成されるため、その続きとして、『モンユエー僧正の古い楽

28) 西暦1243年(西暦1881年)に書かれたと記載のある作品が4編掲載されている。

29) 本文中の作品には「御船歌(フレー・ジン)」と記載されているため、「御船歌」として訳した。

30) 「ローカナッ loka nat」はパーリ語の loka-natha に相当し、世尊(仏陀の敬称)を意味するが、ビルマでは両足にシンバルを挟んで打つ格好で示され、歌舞音曲のシンボルとして使用される[Ministry of Culture 2001: 106]。本稿では「釈尊賛歌(ローカナッ・タン)」と訳したが、この歌謡ジャンルは、「空飛ぶ象と虎の戦いを音楽の音色で仲裁したローカナッを詠んだ歌の種類」と説明される[Ministry of Culture 2001: 107]。

31) 口唱歌で用いられる音名であるが、ここでは「歌」という意味で使用していると考えられる。

32) フラトウツは、現在行われているような、大歌謡の演奏・歌唱について知識人が集まって協議し正しい形を作成する事業のようなものがタールン王の時期に最も早く見られると述べている[Hla Htut 1996: 61]。フラトウツはさらに、この時代、ウー・エー大臣(Mingyi U Aye)が知識人達と比較協議し話し合いをして、演奏法37曲の含まれる『ナラレカ(Naralehka)』という名の文献を編集し記述したと、連邦文化論文集『正しい歌舞音曲の形の見本』という記事に書かれていると述べている[Hla Htut 1996: 61]。同様に、ウィリアムソンはウー・キンゾウ(U Khin Zaw)からの引用を用いて次のように述べている。「彼(タールン王)の有名な大臣であるウー・エーは『ナラレカ』という名の、精霊儀式を含むといわれ、37の精霊それぞれのための『歌謡、踊り、儀式と装飾様式』の編集物といわれるビルマ音楽の論文を用意していた。この論文は後にミャワディ卿ウー・サによって改訂・増補された」[Williamson 2000: 18]。このテキストは後に王室出版(royal press)から印刷されたが、ウー・キンゾウがいうには、土着の音楽のビルマの歴史的文献としてだけ知られるこの本は紛失し、彼自身もコピーも見つけられなかった。彼の友人のウー・サンウィン(U San Win)が一度、折り畳み写本の形で見たことがあるという[Williamson 2000: 18-19]。残念ながら、この『ナラレカ』についても、ピアノ奏者フラトウツの引用文献についても筆者は確認できなかったが、この文献は、後で述べるウー・サの『37精霊の歌』のもとになったのではないかと考えられる。



図1. 『モンユエー僧正の古い楽曲集』の表紙

【出典】ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL 3149: dhay(k)], 2004年12月2日筆者撮影。

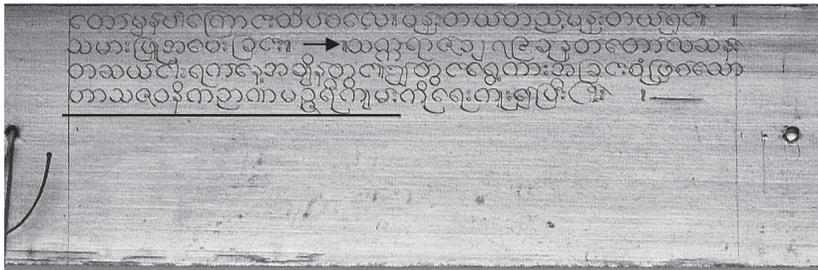
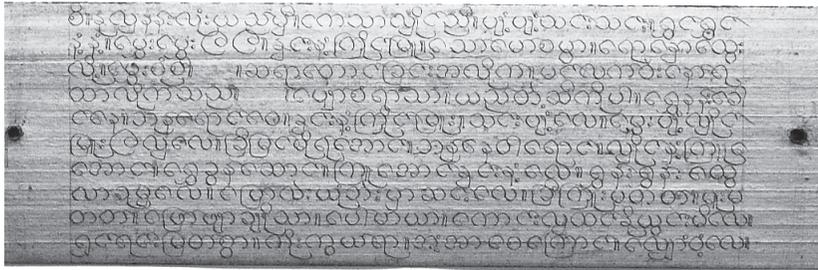


図2. 『モンユエー僧正の古い楽曲集』の結語部分

【出典】ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL 3149: phi(w)-phii(k)], 2004年12月2日筆者撮影。

曲集』について「第12巻」と書かれている。言及されている頁数は、この表紙以降の該当頁である。

図2はこの貝葉の結語部分を示したものであるが、図中の矢印で示した部分には、「1279年ナド一月白分15日（西暦1917年11月29日）に、歌謡集であるハータザワニカーニャナ・ミンザリー・チャン（*Hatha zawanikanyana minzari kyan* 優れた機知の書）を筆写し終えた（下線部と括弧筆者）」とあり、表紙頁に記載されている名称とは別の書名が記載されている。この貝葉は通常、ここに記載されている「ハータザワニカー

ニャナ・ミンザリー・チャン」というパリー語による名称で呼ばれる。筆者が確認できたのは、国立図書館所蔵の筆写年1917年の貝葉と、同図書館で作成された手稿である<sup>33)</sup>。また、この貝葉には、「筆写し終えた」と書かれているので、原本ではなく写本であることがはっきりと分かる。

貝葉にある序文には、この貝葉が作成されるに至った経緯が以下のように記されている。

王室財務担当役人の申請事項。モンユエー僧正の命。皇太子の財務担当役人ヤンダメイッチョーゾワー（*Yandameit*

33) その他、数多くの写本を筆写もしくはタイプ打ちにして出版したことで著名なウー・トゥンイー（*U Htun Yi*）によってタイプされたものが、1974年頃に印刷され100部ほど発行されたと元国立図書館長のウー・キンマウンティンが述べていることをフラッシュエは指摘している [Hla Shwe 1994: 53]。



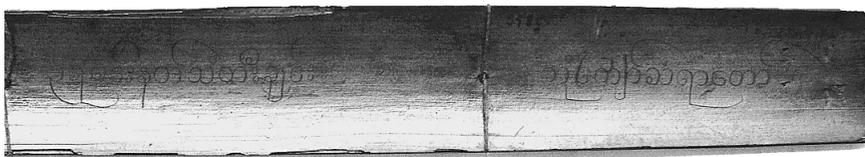


図3. 『37 精霊の歌』の表紙（中央から右部分）

【出典】ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL tin69], 2004年12月9日筆者撮影。

述しないが、この貝葉には同一題名の複数の作品が掲載されており、そのような同一題名の作品中に、口唱歌と歌詞のある作品の組み合わせが21組見られることから、口唱歌は同一題名の歌詞のある作品の演奏部分を記録したものとも考えられる。

## 2 『37 精霊の歌』 [NL tin69]

同じくコンバウン時代に、ウー・サによっても歌謡の収集・編集がなされた。ウー・サは、バジドー王治世 (Bhagyidaw 1819-37) の1820年に、ボードー王治世 (Bhodaw 1781-1819) に開催された精霊祭のプログラムと昔の演奏法を収集し記録することを任せられた [BTS 1966 (vol. 10): 354]。この『37 精霊の歌』の中で、残されている貝葉は、筆写年が1820年 [NL tin69], 1876年 [NL barnard1604], 1893年 [UCL pe11170] の貝葉3点と、1860年に書かれた可能性のある折り畳み写本 [NL pu101] 1点である。これは、歌謡集刊本『大歌謡の世界』 [Yauk n.d.], 『新大歌謡』 [Thuriya Press 1923] の歌謡集刊本2点にも掲載されている。1820年の貝葉は原本である可能性が大きい。この貝葉の表紙を図3に示した。中央に「37 精霊の歌 (Thounze-hkuna min nat-than thachin)」と書かれ、右側には「ボウンチョー

僧正 (Bhounkyaw hsayadaw)」と、この貝葉の所有者であると思われる人物の名前が書かれている。

この貝葉には序文がなく、結語の中にこの貝葉が記載された経緯が書かれている。結語は以下の通りである。また、結語部分がどのように記載されているかの例として、この貝葉の結語部分を図4に示した。

緬暦1167年ダザウンモン月<sup>37)</sup> 白分5日 (西暦1805年10月26日) に、昔から代々奉納してきた37の精霊のために集会所で祭事を開催し踊り演奏する際に、太鼓 (pat), 笛 (hne), シンバル (lingwin) をどのように演奏し踊るかという情報、精霊の宮を守る人<sup>38)</sup> らがどのように衣装を纏うかの記録を、精霊の宮を守る人や演奏者達に訊ねて記録しなければならない。非常に威徳の高い皇太子の勅令を遵守しなければならないことに従い、皇太子の南のバルコニーで環状太鼓<sup>39)</sup> 奏者のミッター<sup>40)</sup>、中国人たち及び演奏ができる者達に訊ねて演奏し示させると、記録しておいた着飾り方、演奏方法と共に、緬暦1182年ダディンジュッ月白分4日 (西暦1820年9月10日) に、偉大な精霊の宮を守る人<sup>41)</sup> であるカウイ

37) ビルマ暦第8番目の月で、太陽暦の11月頃に当たる。

38) 原語は「nat thein nat ne နတ်ထိန်နတ်ဓန」。精霊が祀ってある祠を管理する人。彼らが中心になって祭礼をする。

39) 前述の「環状太鼓 (サインワイン)」と同じものを意味する。

40) 原語は「myit tha မြိတ်ထာ」と書かれており、人名と思われる。

41) 原語は「nat thein gyi နတ်ထိန်ကြီး」となっているが、先の「nat thein nat ne」と同じ意味と捉えて訳した。

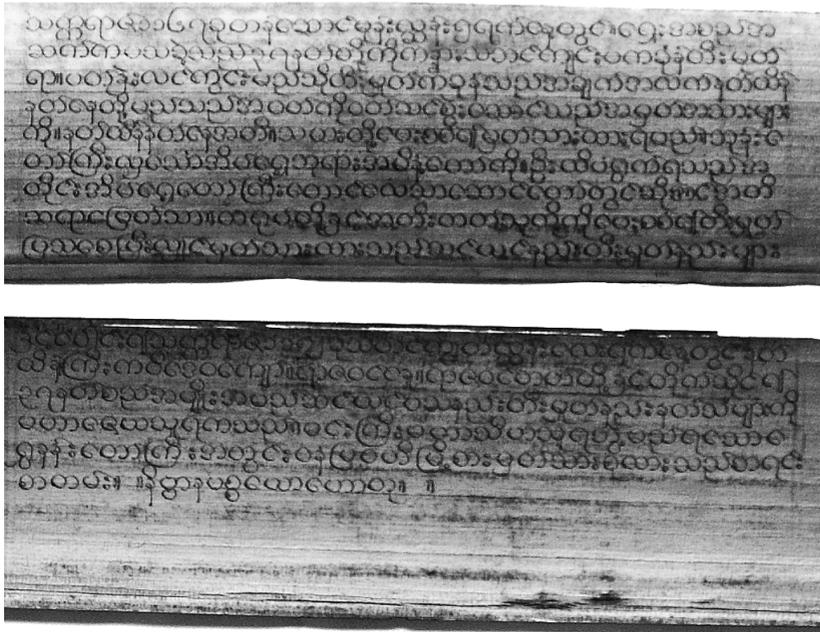


図4. 貝葉における結語部分（『37 精霊の歌』[NL tin69] の結語部分より）

〔出典〕ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL tin69: phan(w)-pha:(k)], 2004年12月9日筆者撮影。

デーワチョー、王統史（不鮮明）、王統史に通じている人たちと照合し、37の精霊の素性、着飾り奉納し演奏する方法、精霊歌を、マハーゼーヤトゥラ、ミンジー・マハーティータトゥラの称号を持つ王宮の秘密官ミャワディ町領主が記録し収集した目録文書<sup>42)</sup> [NL tin69: phan(w)-pha:(k)]（括弧内アルファベットは原文、その他は筆者）。

上記の結語にある「ミャワディ町領主」はウー・サのことであり、この貝葉が1820年9月10日にウー・サによって作成されたことが分かる<sup>43)</sup>。先にも述べたように、貝葉の作成年は序文に書かれ、写本である場合は写本年が結語に書かれる場合が多い。しかし、この貝葉には序文がなく、結語に作成年のみが記されていることから、この貝葉自体が原

本である可能性が考えられる。

精霊歌は、本稿第V章の表11で示すように、後の歌謡集の中には含まれない場合もある。後述する貝葉の『歌謡題名数の御記録』（1870年）[NL barnard1076: khi(k)] や刊本の『歌謡浄化の書』[Ba Cho 1967: 206-209]では、精霊歌はジャンル名として挙げられているが、精霊祭で使用するという限定された目的のためか、大歌謡として含める歌謡集と含めない歌謡集があると考えられる。

### 3 『ウー・サの文集と歌謡集』[UHRC 465], [UCL pe42332], [NL kin351]

これは、『37 精霊の歌』と同様に、ウー・サが編集しているが、こちらは彼個人の作品をまとめたものである。筆者が確認した貝葉写本は1883年、1902年と、年代の記載されていないもの計3点である<sup>44)</sup>。1883年写

42) この後、「neiban pissayo ho tu နိဗ္ဗာန်ပိဿယောဟောတု」とお経で締めくくられている。

43) この貝葉に実際に文字を刻んだ人物がウー・サであるかどうかについては、確認できない。

44) マウンティシン (Maung Kyi Shin) によっても、この貝葉が3冊あり、国家経庫（国立図書）

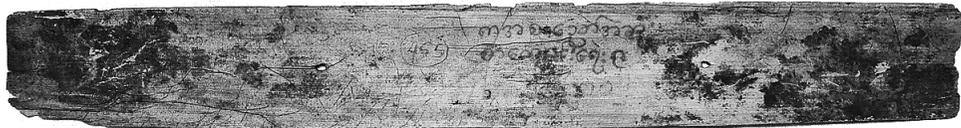


図5 『ウー・サの文集と歌謡集』(1883年写本) [UHCR 465] の表紙

[出典] 大学歴史研究センター所蔵貝葉 [UHCR 465], 2005年3月22日筆者撮影。



図6 『ウー・サの文集と歌謡集』(1902年写本) [UCL pe42332] の表紙

[出典] 大学中央図書館所蔵貝葉 [UCL pe42332], 2005年3月19日筆者撮影。

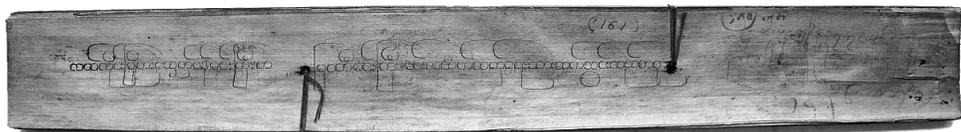


図7 『ウー・サの文集と歌謡集』(写本年不明) [NL kin351] の表紙

[出典] ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL kin351], 2004年12月13日筆者撮影。

本 [UHCR 465] の表紙には表題等の記載はないが(図5参照), 1902年写本 [UCL pe42332] の表紙には「ミャワディ卿<sup>ミンジー</sup>の歌謡, 四音朗詠詩, 季節詩, 戯曲の台詞集」(図6参照)と書かれ, 筆写年の記載されていない国立図書館所蔵の貝葉 [NL kin351] の表紙には, 「ミャワディ卿が歴代の王に書き贈った文集」と記載されている(図7参照)。

図8は, 1883年写本の表紙(図5参照)の次の頁であり, 序文に当たる部分である。

貝葉3点及び刊本を照合すると, 綴りが異なる箇所その他, 部分的な脱落と思われる箇所が見られたが, 作品の掲載順など内容はほぼ同じである。従って, それぞれの底本は同じであると推察できることから, これらの貝葉を, 刊本の題名を取って『ウー・サの文集と歌謡集』と便宜的に本稿では呼ぶこととする。また, 国立図書館所蔵の貝葉の表

紙左側には「レーカイン町領主小銃兵団指<sup>ミンジー</sup>揮官<sup>ミンジー</sup>の文書」と所有者名が記載されている(図7参照)。この人物は, コンバウン時代の代表的な年代記である『コンバウン王統史』[Maung Maung Tin 2004 (1905)]に登場する「レーカイン町領主保安徴税監督官小銃大臣」と同一人物であると考えられる。『コンバウン王統史』[Maung Maung Tin 2004: 288]の中では, 緬曆1238年ダザウンモン月黒分<sup>45)</sup>13日(西曆1876年11月13日)の出来事について記載されている頁にこの人物が登場している。従って, この国立図書館所蔵の貝葉は写本年が記載されていないが, 1876年前後の時期に書かれたことが推察される。序文に, この貝葉が作成された経緯が記載されている。ここでは, 写本年が明記されている中で最も古い1883年写本に基づきその序文(図8参照)の訳を以下に示す<sup>46)</sup>。

↗ 館)にあるキンウンミンジーの貝葉, ヤンゴン大学図書館のもの, 歴史委員会(大学歴史研究センター)のものであると指摘されている [Maung Kyi Shin 1968: 181-182]。

45) 満月過ぎの月の後半。

46) 序文の出だしにパーリ語の総礼文があり, 大学中央図書館蔵の写本 [UCL pe42332] と国立 ↗

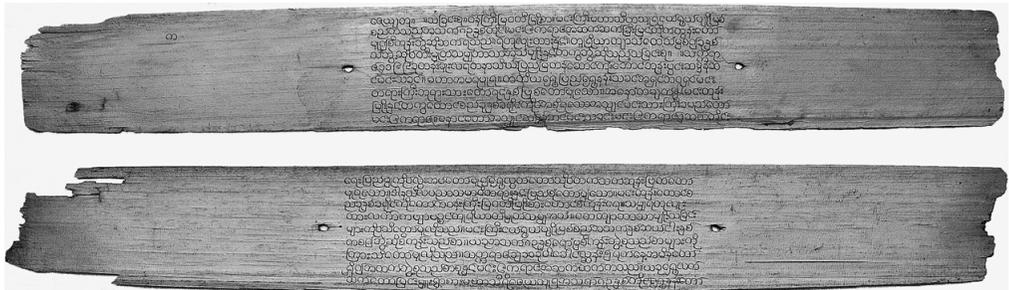


図 8. 『ウー・サの文集と歌謡集』(1883年写本) [UHCR 465] の表紙の次の頁

[出典] 大学歴史研究センター所蔵貝葉 [UHRC 465: ka(w)-kaa(k)], 2005年3月22日筆者撮影。

歌謡集。宰相<sup>ウツジー</sup>ミャワディ町領主<sup>ミンジー</sup>卿マハーティハトゥラ<sup>47)</sup>が若い時から83歳に至るまで、代々の国王陛下が表彰し奨励なされたことにより、書き詠んで献呈した季節詩<sup>ヤドゥ</sup>、四音朗詠詩<sup>ル-ウ-タ-</sup>と楽器のター音、ター音(以上音名)をはじめとする7音<sup>48)</sup>で詠み演奏した全ての音と共に詠んだ歌謡を集めたもの。緬曆1199年ダグー月(西曆1838年3-4月)、ヤダナーテインガ(シュエポー)の国々の灯りであるコンバウの威光が開いた六牙象<sup>49)</sup>王の主人であり、偉大なアマラプラの第三の王宮の主である国王陛下大正法王の王子であり愛児であられる北側のミンドン町と共に七金山<sup>50)</sup>を治める大王子の父君の国王陛下、兄君陛下の六牙象王の主人であられる国王陛下二代にわたり、国政を一任なされて、御國務院へ行かれて決定をなされる、布施、戒律、智慧、正、法を備えておられる、ミンドン<sup>ウツジー</sup>七金山御自身が、宰相ミャワディ町元領主が書いた全ての季節詩<sup>ヤドゥ</sup>、四音朗詠詩<sup>ル-ウ-タ-</sup>、

四行古詩、詩、5種の楽器<sup>51)</sup>で演奏した全ての音、ターやター音などで作られた歌謡をお知りになりたく思われた。卿<sup>ミンジー</sup>が若い時の25歳より詠み書いた文章、今83歳になってから書いた文章を聞き知りたく思われた。緬曆1211年ワーガウン月白分5日(西曆1849年7月24日)に勅令があり、以前に書いた文を集めたものと、代々の国王陛下を経て今の御代にミンムー村領主マハーティリゼヤトゥラとしての83歳に至るまで(に書いたものを)、王宮の前の家で幸福に息子、娘、孫、曾孫と共に、布施、瞑想に力を注いで暮らしていたその家で、勅令によって書いた文集 [UHRC 465: ka(w)-kaa(w)] (括弧内筆者)。

上記の序文より、この貝葉が緬曆1211年(西曆1849年)のミンドン(Mindon、後に王。治世1853-1878)皇太子の勅命によって、ウー・サが25歳から83歳までの間に書いた作品を記録したものであることが分かる。

↗ 図書館蔵の写本 [NL kin351] 及び刊本 [Zwe Sape Press. 1967: 1] ではその総礼文は共通しているが、大学歴史研究センター蔵 [UHRC 465] の総礼文は異なる。ここでは訳出しなかった。

47) ウー・サの称号。

48) 古典音楽は1音階が7音で構成され、その音を指す。

49) 牙から六つの光を出すという象で [Houk Sein 1978: 254]、ヒマラヤ山中の湖岸の数千の象たちの王を指し、国王を讃える比喩として王統史や詩歌でしばしば用いられる。

50) 原文中では「taung si hkuhnit hkayain တောင်စဉ့်ခန့်စဉ့်ခန့်」となっているが、「taung sin hkuhnit htat တောင်စဉ့်ခန့်စဉ့်ခန့် (七金山、須弥山を取巻く七重の山 [大野 2000: 257])」のことと考えられる。

51) boun ဝံ (両面太鼓) | maung မောင်း (銅鑼) | si ဝဉ်း (小型のシンバル) | lingwin လင်းကွင်း (シンバル) | hne နံ (オーボエ) [大野 2000: 389]。

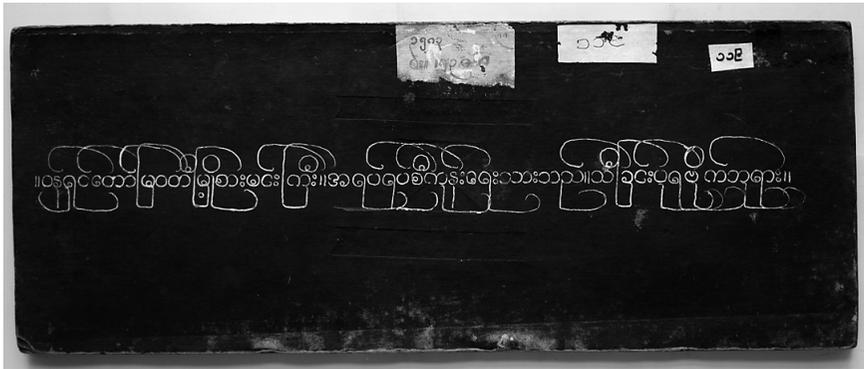


図9. 『軍司令官ミャワディ町領主卿が詠んだ諸々の歌謡の折り畳み写本』の表紙  
 [出典] ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL pu119], 2004年12月3日筆者撮影。

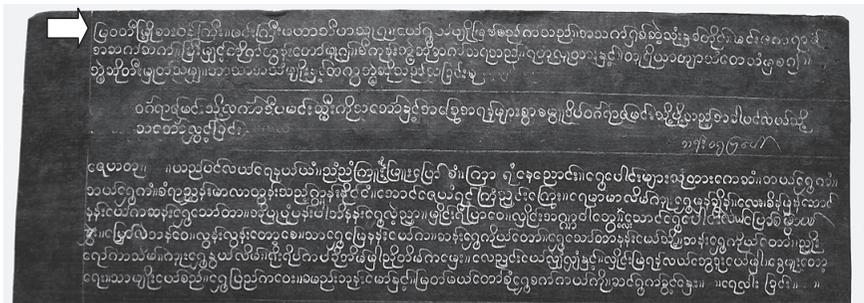


図10. 『軍司令官ミャワディ町領主卿が詠んだ諸々の歌謡の折り畳み写本』の本文冒頭  
 [出典] ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL pu119], 2004年12月3日筆者撮影。

ウー・サは1766年生まれであり、当時83歳である。その後、87歳の1853年にウー・サは亡くなる。この貝葉は、ウー・サが25歳から83歳まで、1791年から1849年までの58年間に作られたウー・サの作品集ということになる。

本文は、歌謡・韻詩作品、ウー・サが参加した戦争の記録と歌謡作品、戯曲の順に記載されている。分量からも、かなり大部な歌謡集、文集である。また、個人の作品集である点も興味深く、写本が数点ある点も他の歌謡集と異なり特筆すべきである。

折り畳み写本の中に、「軍司令官ミャワディ町領主卿が詠んだ諸々の歌謡の折り畳み写本」との表題で(図9参照)、本文冒頭に「ミャワディ町領主宰相，卿，マハーティーハトウラが、若い頃から83歳まで、代々の

王にわたって、表彰され奨励されて、詠み綴って贈った季節詩，四音朗詠詩と、楽器の音をはじめ、詠み演奏した全ての言葉と音と共に詠んだ歌謡集」[NL pu119: 3]と記載されたものがある(図10矢印部分参照)。貝葉の『ウー・サの文集と歌謡集』と同じものと考えられるが、この折り畳み写本には作品が18篇しか掲載されておらず、貝葉の『ウー・サの文集と歌謡集』を途中まで書き写したのと考えられる。この折り畳み写本は作成年が確認できないが、『ウー・サの文集と歌謡集』が貝葉と折り畳み写本において何度も筆写されていることに基づくと、『ウー・サの文集と歌謡集』が重要なものとして位置づけられていたことが推察できる。

『ウー・サの文集と歌謡集』の貝葉を見ていくと、ジャンル名を付されていない作品が

表4. 『ウー・サの文集と歌謡集』に登場する歌謡ジャンル名

歌謡ジャンル名	作品数	
承前歌	4	
編み歌	23	
弦歌	5	
(精霊歌)	おなだめになられる歌	2
	精霊の歌	1
	ガネーシャ神歌	1
	15名の大精霊の四行古詩	1
ティンガー氏歌謡	3	
ダウエー語歌謡	35	
季節詩	8	
四音朗詠詩	21	
合計	104	

【出典】貝葉【UHRC 465】より筆者作成。

多く含まれている。また、一部の作品には作られた年や月日が明記されているが、年代順にまとめられているわけではない。この貝葉に登場するジャンル名は、表4の通りで、ジャンル名の付された作品の数は合計104篇である。また、この貝葉におけるジャンル名の付されていない作品の数は84篇である。

表4に示したように、「精霊歌」の下位区分として四つの歌謡ジャンルが挙げられており、『ウー・サの文集と歌謡集』に登場するジャンル名は合計11である。しかし、後述の本章5『大歌謡の世界 (Maha gita medani gyan)』以降で見る歌謡集の中では、パッピョーというジャンルにおいてウー・サが最も多くの作品の作者として挙げられているにも関わらず、ウー・サが彼自身の作品を編集した『ウー・サの文集と歌謡集』においては、パッピョーというジャンル名が登場していない。同様に、アユタヤ歌やモン歌というジャンル名も登場していない。このことから、パッピョーやアユタヤ歌、モン歌というジャンル名は、作品が作られた当時ではなく、後に命名された可能性が高い。また、全ての作品に

ジャンル名が記載されているわけではないことから、『ウー・サの文集と歌謡集』の時点では、全ての歌謡をいずれかのジャンルに帰属するものとする認識はなかったことが指摘できる。

#### 4 「歌謡題名数の御記録」[NL barnard1076]

これは、歌謡作品の目録集であり、作品自体は掲載されていない。この貝葉では、作品の題名もしくは歌詞の出だし部分が目録化されており、注目すべき点として、ジャンルごとにとまとめられていることがあげられる。この貝葉は、歌謡をジャンルごとに整理したものであるとして確認できる最も古いものということができ、この時点で、歌謡はいずれかのジャンルに帰属するものと認識されていることが分かる。序文に、この貝葉が作られた経緯が以下の通り記されている。

緬曆1232年カソン月<sup>52)</sup>黒分9日(西曆1870年5月23日)に、非常に御徳の高くおわせられますマンダレーの宝に満ちた世<sup>53)</sup>である(Mandalay yadanabhoun)大王都をお建てになられた大正法王の弟君、タペー(Tape)町、モーフナイン(Mawhnaing)町、チャウンウー(Chaung oo)の10の村領主、主君の王子が(王の)勅令に従い、マハータピン(Maha Thapin)の治世から伝わってきて、マンダレーの宝に満ちた世である大王都と王宮をお建てあそばされた大正法王の御世に至るまで(伝わってきた)5種の楽器の音と王の祭礼を開催する際に用いる、昔からのしきたりを崩さずに作詞し演奏した歌謡が消滅しないように、お知りになりたい、立派にきちんと記録し記述しなければならないという尊い勅令に従い、5種の楽器の音を、辞書にある通りに滅びないよ

52) ビルマ暦第2番目の月で、太陽暦の5月頃に相当する。

53) 「宝に満ちた世」は王都であるマンダレーの雅称。





図 11. 『歌謡題名数の御記録』におけるジャンル名と作品目録の記載

【出典】 ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL barnard1076: kaa(w)-ki(k)], 2005年3月22日筆者撮影。

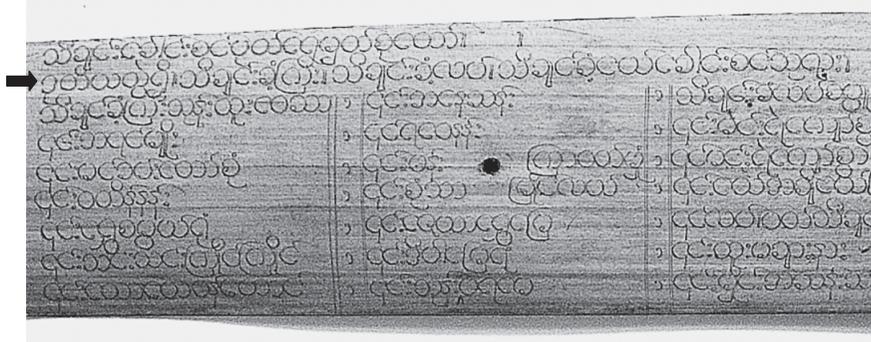


図 12. 『歌謡題名数の御記録』で区分されているジャンル名の例 (1) (図 11 の①の部分の拡大図)

【出典】 ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL barnard1076: kaa(w)], 2005年3月22日筆者撮影。

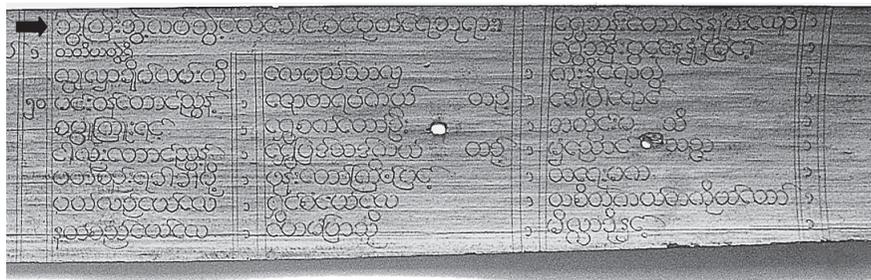


図 13. 『歌謡題名数の御記録』で区分されているジャンル名の例 (2) (図 11 の②の部分の拡大図)

【出典】 ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL barnard1076: ki(k)], 2005年3月22日筆者撮影。

うに、序文の直後から「第2巻」として目録が記述されていることから、「第1巻」は、この『歌謡題名数の御記録』自体だと考えることができる。この貝葉に見出しとして掲載されたジャンル名とそれぞれの中に分類されている題名の数を表5に示した。

表5に示したように、『歌謡題名数の御記

録』においては、歌謡のジャンル名がはっきりと記載され、並列に並べられるものとして提示されており、個々の歌謡作品は全ていずれかのジャンルに帰属するものとして整理されている。このうち、作品数が最も多いジャンルは、「第4巻」相当の弦歌であり、次に多いのが「第3巻」相当の編み歌である。パッ

表 5. 『歌謡題名数の御記録』の構成

巻数	見出し	題名の数
2 巻	大承前歌, 中承前歌, 小承前歌の題名	50
3 巻	大編み歌, 中編み歌, 小編み歌の題名	132 <sup>57)</sup>
4 巻	大弦歌, 中弦歌, 小弦歌の題名	180 <sup>58)</sup>
5 巻	大パッピョー, 中パッピョー, 小パッピョー, 戯曲中のパッピョーの題名	103 <sup>59)</sup>
6 巻	戯曲中のパッピョー, 変わり歌・緩慢歌, 緩慢歌, 重畳歌, 季節を詠んだ主音回帰四行詩, 田舎の人々の生活の主音回帰四行詩, 夫哀歌, 変わり夫哀歌, 一個の石の歌, 大笛の歌の題名	178 <sup>60)</sup>
7 巻	大歌, 四穴音付着歌, 精霊を招く四音朗詠詩, 精霊を招きなだめる歌, 歌声のよい精霊歌をお供えされる 15 名の大精霊の四行古詩の題名	
	大歌	20
	四穴音付着歌	33
	精霊を招く四音朗詠詩	4
	精霊を招く弦歌	8
	精霊をなだめる歌	3
	歌声のよい <sup>61)</sup> 精霊歌	57
合計	(125)	
8 巻	タライン族歌謡, ダウエー地方歌謡, テインガー氏歌謡, アユタヤ歌謡, 積尊賛歌, 「蓮から出てくる」で始まる作品の音の通りに作られたタライン族歌謡風のダウエー語歌謡, 季節詩, 四音朗詠詩の題名	
	タライン族歌謡	11
	ダウエー地方歌謡	2
	テインガー氏歌謡,	4
	アユタヤ歌謡	38 <sup>62)</sup>
	ダウエー語歌謡	51 <sup>63)</sup>
	季節詩	9
四音朗詠詩	18	
合計	(133 <sup>64)</sup> )	
9 巻	馬術弦歌	46
10 巻	37 の精霊, 精霊の王統史, 精霊像の形, 衣装の着方, 精霊歌の叫び方, 供え方, 演奏の仕方, 歌い方, 演じ方の題名	115
	合計	1062

[出典] 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

57) 貝葉中には「編み歌合計 131」と記載されているが、実際には 132 篇掲載されている。

58) 貝葉中には「弦歌合計 179」と記載されているが、実際には 180 篇掲載されている。

59) 貝葉中には「パッピョー合計 105」と記載されているが、実際には 103 篇掲載されている。

60) 貝葉中には「合計 167」と掲載されているが、実際には 178 篇掲載されている。

61) ここでは「演奏が美しい」と記載されているが、第 7 巻の表題と統一した。

62) 貝葉中には「合計 40」とあるが [NL barnard1076: kha(k)], 実際には 38 篇掲載されている。

63) 貝葉中には「合計 50」とあるが [NL barnard1076: khaa(w)], 実際には 51 篇掲載されている。

64) 貝葉中には「合計 139」とあるが [NL barnard1076: khaa(k)], 実際には 133 篇掲載されている。

ピョーに属する作品は、「第5巻」と「第6巻」にまたがって掲載されており、「第6巻」に相当する部分ではパッピョーと他のジャンルを区別せずに掲載していることから、パッピョーの正確な数は確認できないが、パッピョーの数も弦歌と編み歌に次いで多いことがいえる。

この貝葉以降に作られた歌謡集は全て、ジャンル名を明記し、ジャンルごとに作品を記載する形を取っている。また、この貝葉以前の貝葉の表題は、特定の人物が編集したものであることを示すものか、個々の歌謡ジャンル名（37精霊の歌）や特定の人物の作品集であることを示すものであった。つまり、歌謡を包括する形では表題が掲げられていなかった。しかし、『歌謡題名数の御記録』以降の、以下で見ていく貝葉と刊本（次章）においては、歌謡作品群がひとつのまとまりとして位置づけられていることが、表題と構成から分かる。

##### 5 『大歌謡の世界』[UCL pe11170], (刊本 [Yauk 1881])

筆者がここで挙げるのは1893年の貝葉であるが、前述したように、これは歌謡集の最初の刊本として1881年に発行された。また、「大歌謡（マハーギータ maha gita）」という言葉が最初に確認できる<sup>65)</sup>歌謡集であることが指摘されている [Hla Shwe 1994: 10]。筆者が確認した刊本には出版年が記載されておらず、1881年当時発行されたものは、今では残されていないことが指摘されている [Hla Shwe 1994: 11]。本稿第三章2でも指摘したように、1893年の貝葉は、刊本の初版年である1881年より12年後のものとなっていることから、貝葉と印刷された刊本の両方がこ

の時期には使用されていたことが分かる。

この貝葉は表紙にはもともと何も書かれておらず、ペンで「大歌謡の世界 (Maha gita medani)」と後から書かれている様子である。表紙の次の頁から作品が掲載されるが、図14に示したように、この貝葉の各頁の表側（頁記号が書かれた腹側）には右横に「大歌謡の世界 (Maha gita medani gyan<sup>66)</sup>)」と刻まれている (図14 矢印部分参照)。

図15に示したように、貝葉の途中 [UCL pe11170: ngi(k)] (図15 矢印部分) から、ウー・サの「37精霊を指示する精霊歌」が記載されている。刊本では、116頁までは歌謡が掲載され、貝葉と同じく後半は「37精霊を指示する精霊歌」が併記されている。この両方をまとめて掲載したものが『大歌謡の世界』という題名でくくられていることが、刊本に掲載された序文（後述）から分かる。

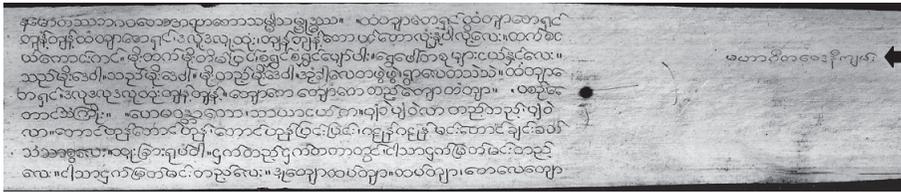
図15の矢印で示した「37精霊を指示する精霊歌」が始まる部分以降には、先にみた貝葉『37精霊の歌』[NL tin69]と同じ序文が掲載されていることから、両貝葉は同じ原本に基づいて作られた筆写本であり、こちらは1893年の筆写本であることが分かる。

貝葉写本には序文がないが、刊本には序文が掲載されており、この歌謡集が編集された背景について以下の通り記載されている。

(前略) 軍司令官卿ウー・サが (中略), タンシャー (than sha 希少な音), タンヨー (than yo 伝統的な音), パッピョー, 鼓始歌, 弦歌, アユタヤ歌の全て, 演奏法, 歌唱法若干を (中略), もとの形にし, 誤り, 意図がはっきりしていない箇所, 悪いものが付着している箇所を, 祭事の書籍と一致するように書き綴ったも

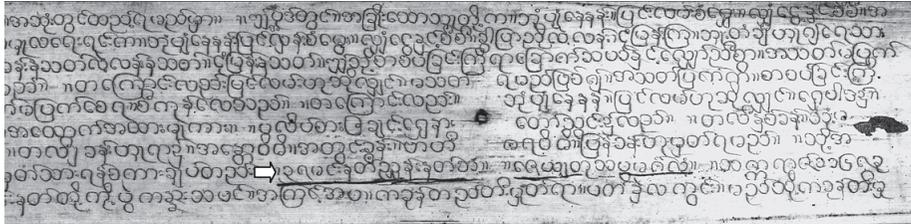
65) コンバウン時代後半に、シュエタイソエ・ウー・ラン (Shwetaik-soe U Lan) と報道官ウー・ターアウン (Thandaw-hsin U Tha Aung) が『マハーギータの贈り物集』を編集したという記録があるが、原本が見つからないとピアノ奏者フラトゥッは述べている [Hla Htut 1996: 64-65]。筆者もこれについては確認できなかった。

66) “Gyan (Kyan)” は「文献、書籍」の意味。



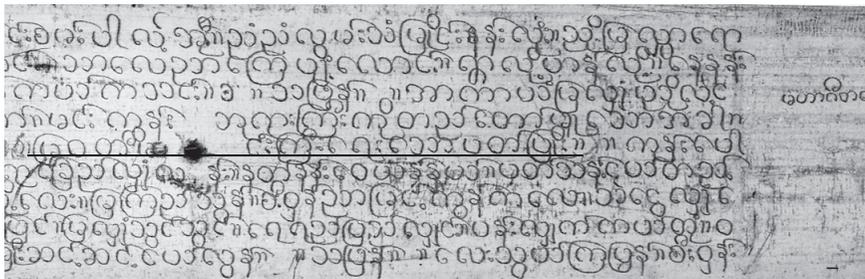
マハーギータ  
図 14. 『大歌謡の世界』 [UCL pe11170] の最初の頁

[出典] 大学中央図書館所蔵貝葉 [UCL pe11170: ka(w)], 2005 年 3 月 1 日同図書館にてスキャナ撮影。



マハーギータ  
図 15. 『大歌謡の世界』に掲載された「37 精霊を指示する精霊歌」の開始部分

[出典] 大学中央図書館所蔵貝葉 [UCL pe11170: ngi(k)], 2005 年 3 月 1 日同図書館にてスキャナ撮影。



マハーギータ  
図 16. 『大歌謡の世界』に掲載された歌謡ジャンル名

[出典] 大学中央図書館所蔵貝葉 [UCL pe11170: gii:(w)], 2005 年 3 月 1 日同図書館にてスキャナ撮影。

の他、檀家の歌謡の文書から抜粋して、先に述べたような学者である優れた識者たちの祭書の書籍である大歌謡の世界 (Maha gita medani) という名前の書を、私、タイエーキッタヤー・ピー町 (Thayehkittaya Pyi-myō) 在住の公認弁護士ウー・ヤウツ (U Yauk) が、弦歌、編み歌、大編み歌、パッピョー、アユタヤ歌、重畳歌などと 37 精霊を指示する精霊歌を一冊の書にまとめて、持ち運びを容易にするために編纂し書き記そう [Yauk n.d.: 2] (括弧内日本語筆者)。

上の序文からは、ピー町に住む公認弁護士ウー・ヤウツという人物が編者であることが分かる。また、この歌謡集を作成した背景として、歌謡の奏法が「正しい」とされる形から崩れてきているため、「正しい」ものを記録に残し、それを一箇所にまとめることが意図されていたことが分かる。現在、「古典歌謡」の総称として用いられる「大歌謡」という概念の枠組みがどのように設定されているかについて、「大歌謡 (マハーギータ)」という言葉が最初に書かれたといわれているこの書に明記されているといえる。

この貝葉に掲載された各作品の題名にはジャンル名が記載されている。たとえば、

表 6. 『大歌謡の世界』(1893年写本)の構成

掲載順	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
ジャンル	弦歌	編み歌	テインガー氏歌謡	承前歌	鼓承前歌	パッピョー	モン歌謡	アユタヤ歌	重疊歌	合計
ウー・サ	3	17	1	4	6	30		2		63
ウー・ルンペー	4									4
ミン・テインガー			1							1
ミンザイン・サヤーバン	1									1
ウー・アウンドー				1						1
ケトゥマディー・タウングー王				2						2
ミン・イェー・チョーゾワー				1						1
ミングン王子						2				2
マミヤガレー						2				2
マウン・チャウケー						6				6
大臣夫人キンソウン						4				4
ミンザイン王女						1				1
ポートゥドー・ウー・ミン									2	2
マウン・ペー									1	1
作者未詳	43	9	1	4		23	1	6		87
総作品数	51	26	3	12	6	68	1	8	3	178

[出典] 貝葉 [UCL pe11170] より筆者作成。

図 16 の下線部には、「<sup>ミンジー</sup>ミャワディ 卿が書いたパッピョー (Myawadi mingyi ye thaw patpyo)」と書かれ、「パッピョー」というジャンル名が明記されている。そして、ジャンルごとに作品がまとめて掲載されている。掲載されている歌謡作品数は 178 篇、作者は 14 名、また作品数全体のうち作者未詳の作品は 87 篇である。貝葉におけるジャンルの構成と、作者ごとの作品数を表 6 に示した。

表 6 の 5 「鼓承前歌 (パッ・タチンガン pat-thachingan)」というジャンルに注目したい。同本の貝葉では、「鼓承前歌」[UCL pe11170: gi(k)] と記載されており、刊本では「パッピョー・承前歌 (パッピョー・タチンガン patpyo-thachingan)」[Yauk nd: 59] と記載されている。貝葉中の該当箇所を図 17 に示した。

図 17 の下線部で示した部分には、「大承前歌終了。ミャワディ 卿の書いた大鼓承前歌 (パッ・タチンガン・ジー) (Thachingan-

gyi pi i. Myawadi mingyi ye dhaw pat-thachingan-gyi)」と書かれ、続いて「ボウンピャンネーナン」の歌詞で始まる作品が掲載されている。「大承前歌終了」とは、この部分まで承前歌に属する作品が掲載されていたことを意味する。そして、この「ボウンピャンネーナン」の歌詞で始まる作品が掲載された後 [UCL pe11170: gii:(w)] に、パッピョーに属する作品が掲載されており、「鼓承前歌 (パッ・タチンガン pat-thachingan)」が承前歌とパッピョーの間に位置されている。「ボウンピャンネーナン」で始まる作品は、『著名歌謡作品全集』[NL 3149: nyuu(w)] では承前歌の項目に入れられている。しかし、後述する刊本の『国家版大歌謡』[Ministry of Culture 1969: 66-68] ではパッピョーの項目に入れられており、現在では、パッピョーの代表的な作品のひとつとして位置づけられている [Saw Mya E Kyi 1968: 32]<sup>67)</sup>。「鼓承前歌 (パッ・タチンガン)」という名称と、

67) パッピョー作品の中で代表的なものとして位置づけられている作品が 4 篇あり、そのひとつに「ボウンピャンネーナン bhoun pyan ne nan ၵံးပိယံးနီၵ်း」の歌詞で始まる作品が含まれる [Saw

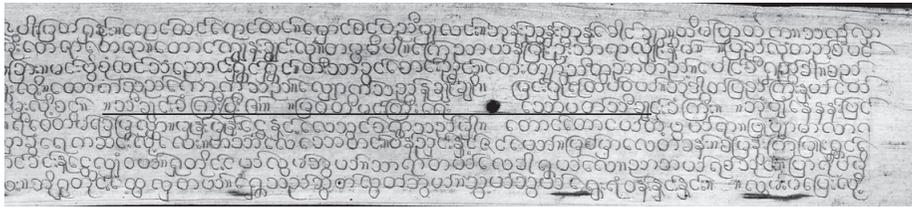


図 17. 『大歌謡の世界』中の「鼓承前歌 (パツ・タチンガン pat-thachingan)」

【出典】大学中央図書館所蔵貝葉貝葉 [UCL pe11170: gi(k)], 2005年3月1日同図書館にてスキャナ撮影。

そこに分類されている作品が後の歌謡集の中で承前歌タチンガンに分類されている場合とパッピーパッピーに分類されている場合があることから、両方のジャンルに解釈可能な作品があることが分かる。

この貝葉のその他の特徴として指摘できる点は、弦歌チョーとパッピーパッピーに分類された作品が他のジャンルの作品に比べてはるかに多く、総作品の66%を占めていることである。また、各ジャンルにおける作者の数を見ると、パッピーパッピーを手がける作者数が6名であり、最も多い。さらに、作者の中では、とくにウー・サの作品数が多く、63篇ある。ウー・サの作品は、全作品の35%、作者名の分かる作品91篇においては70%を占めている。

## 6 『著名歌謡作品全集』[NL 3149]

貝葉の中で、最も写本が新しいのは、ウェッマスッ郡長が編集した『著名歌謡作品全集』である。現在確認できる写本は国立図書館所蔵の1917年の貝葉であるが、その底本の存在は不明であり、原本は序文に記載されておらず、確認できない。編者のウェッマスッ郡長は、ミンドン王とティーボー王(Thibaw 治世 1878-1885)に仕えた廷臣であ

り、年代記の『コンバウン王統史』[Maung Maung Tin 2004: 125]では緬暦1215年ダザウンモン月白分7日(西暦1853年11月7日)に最初に登場している。従って、この貝葉の原本はミンドン王治世以降に作られたことが推察できる。この貝葉は、ティーボー藩公(Thibaw sawhbwa)<sup>68)</sup>の要請によって編集された<sup>69)</sup>。これは、刊本も含めて現存する歌謡集の中で作品数が最も多いものである。1999年に文化省より刊行されている。以下に示した序文に、この貝葉が作成された経緯が記されている。

昔の知識人達が詠み記した歌謡、韻詩は、長い年月が経ったために、記述の間違い、ズレが生じ、各篇、各部が一致せず間違い逸脱しており、もとの作者の意図した意味に至っていない。演奏は正しくなく、一部においてはしつこく、一部においては物足りないといった状態である。意味、性質がもとの通りではなく、意味をなしていない歌謡・韻詩を、学び、眺め、記憶し、聴き、徹底して覚えこんでいるために、今後学ぶ者たちも、良いやり方を身に付けることができない

↗ Mya E Kyi 1968: 32]。その他の3篇は、「コンバウンパラメー konbaung parame ကုန်းတောင်ဝရမေ」, 「フマインフモウンピャーウエーフニン hmoin hmoun pya we hnin ဝိုင်းပန်းပြာဝေဒံ」, 「アトゥードゥーゲー ahtu htuge ဝေးဝေးဝေဝေ」の歌詞で始まる作品で、いずれもウー・サの作品である [Saw Mya E Kyi 1968: 32]。

68) ミンドン王の王女のパカンジー・スパヤジー (Pahkangyi supayagyi) と結婚したソークンサイン (Sohkunsain) 藩公の後継。

69) 1917年写本の序文にはこのように記載されているが、タウングインの僧団長の僧侶のもとにあった貝葉を、ティーボー藩公が手配して書き写したのもといわれる [Hla Shwe 1994: 57-58]。

ことが考えられるため、郡長のウェツマ  
スツ町領主ミン・ミンジーミンティン・  
マハーソードゥ (Wetmasut myoza  
min mingyi min htin maha sidhu) は、  
研究としてそれらの歌謡・韻詩を以前か  
ら学んできていたため、マンドレーの第  
二の王位に就かれた六牙象王の主である  
大正法王陛下の八万の右の正妃がお生み  
になられた黄金の思春期の愛しい三人の  
王女に対して、エメラルドの揺り籠に  
お乗せになられる儀式において、大正  
法王陛下の命じられた尊い御下命によ  
り、吉祥の史謡<sup>エイ・ジン</sup>3首と共に、エメラル  
ドの揺り籠に置く三節構成四音朗詠詩、  
住職葬送歌<sup>エイ・ジン・チム・ジン</sup>、王宮揺り籠歌<sup>アム・エー・ラ</sup>の旋律、  
銅鼓アユタヤ歌<sup>ヨーダヤー・チエートワー</sup>などあらゆる歌を丸々  
三回詠んで書いて贈ったことがある  
のと同様に、ティーボーオウンバウ  
ン (Thibawounbhaung)、トウンゼー  
(Thounze)、マインロウン (Mainloun)、  
マイントウン (Maintoun) の四つの  
町の大藩侯であるタキン・ソーチェー  
(Thahkin Saw Che) は、それらの歌  
謡の歌詞を学び熟達していることから、  
今後末永く存続するように、意味を  
同じく統一し収集させたくて、郡長の  
ウェツマスツ町領主ミンにお願いし勸  
めて、歌謡・韻詩を読み書くことにお  
いて熟達している人物というべきであ  
ると褒め称えるべきピンズィ町領主王  
子トゥティーリマハーダンマヤーザー  
(Pyinsi myoza mindha thuthiri maha  
dhamma yaza)、ミャワディ町領主<sup>ミンジー</sup> 卿  
ミンジー<sup>70</sup>・ティーリマハーティー  
ハトゥラ (Myawadi myoza mingyi  
myigyithiri maha thihathura) らの音  
から、(中略) 弦歌、編み歌、承前歌、パッ  
ピョー、銅鼓アユタヤ歌、モン歌謡、  
ダウエー語歌謡、テインガー氏歌謡、

デーケーリー<sup>デーケーリー</sup>歌謡愛奏歌、燭台舞踊歌、  
などの種々の歌を順番に綺麗に整えて書  
き記した(後略) [NL 3149:(w)-kaa(w)]。

上記の序文から、この歌謡集の編集が、先  
に見た『大歌謡の世界』の序文で掲げられて  
いた目的と同じく、歌詞の異本の統一を意図  
してなされたことが分かる。また、序文の中  
に、弦歌、編み歌、承前歌、パピョーなど  
と歌謡ジャンル名が明記されていることか  
ら、歌謡がそのジャンル名によって指示さ  
れていることが分かる。さらに、ウー・サ  
(上記の中では、「ミャワディ町領主卿<sup>ミンジー</sup>  
ミンジー・ティーリマハーティーハトゥラ」と記  
述されている) について、歌謡と韻詩の創作  
において優れた人物として挙げられ、ウー・  
サの作品をこの貝葉に掲載する旨が述べられ  
ることから、ウー・サの時代以降にこの貝葉  
が作られたことが推測できる。

中身を見ると、先に見た『大歌謡の世界』  
と同様に作品がジャンルごとに掲載されてい  
るのみならず、ジャンルが変わるごとに1頁  
を割いてジャンル名を表題として記載するな  
ど、章立てが綺麗に行われ、非常に整理され  
た形になっている。図18は、この貝葉の表  
紙及び表紙の一部の拡大図である。

図18の中央に大きな文字で書かれている  
のは、「弦歌 (kyo-gyin)」というジャンル名  
で、この頁の後から弦歌に属する作品が掲載  
されている。図18の左上には、貝葉名「著  
名歌謡作品全集」と記載され、図18の上の  
図の右上には「ティーボーオウンバウンの四  
つの町の主の御文書」と持ち主が記載されて  
いる。ビルマ最後の王であるティーボー王が  
イギリスによってインドに連行された後、音  
楽家、芸術者達はティーボー町へ行き、大  
藩侯のサーソーチェー (Hsa Saw Che) の  
もとに身を寄せたと伝えられている [Nan  
Nyunt Swe n.d: 31]。このような背景のもと、

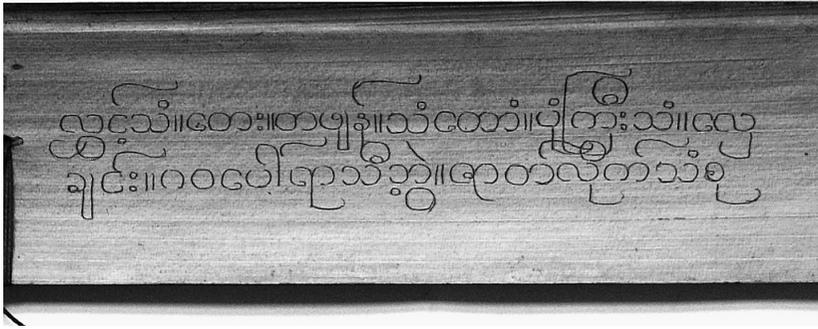
70) 「卿 (ミンジー)」が二回続けて記載されているので、一つ目のみ「卿」と訳し、二つ目は訳出しな  
かった。



表7. 『著名歌謡作品全集』の構成

掲載順 ジャンル 作者名	1	2	3	4	5	6	7	8	9					10			11	合計
	弦歌	編み歌	パツピョー	承前歌	アエタヤ歌	モン歌謡	ダウエー語歌謡	憂奏歌	燭台舞踊歌					合唱歌			その他	
									燭台舞踊歌	ティンガー氏歌謡	四穴音付着歌	デーケーリー歌謡	緩慢歌	合唱歌	筏乗り歌	哀歌		
ウー・サ	10	36	83	10	3	2	6	16	4	5	2	1	1	0	0	0	15	194
ピンズィ王子	12	6	13		10	7				1							1	50
レウウェーノーヤター	10			4														14
ピンタレーウン	1																	1
ネーミョー・マハーチョーティン	3																	3
ビャティーサー村領主ウー・ルンペー		3		1														4
タウングー王乳母メーロウツ		2																2
シユエー・ゼーヤバテ		3		1														4
ゲートーウン		2	12	2			1											17
タベスウエー村領主ウー・ミヤエイツ		1																1
マミヤガレー		1	5															6
マウン・チャウケー			9															9
バカン王子			1															1
シユエーバカン大王子				1														1
クツ村卿夫人			7															7
ウー・ミンアウン			2															2
船主マウンソー			1															1
称号書記官マウントゥー			1															1
皇太子妃			3		1													4
ピンズィ王子の娘ティットティンチ			8															8
ミヤウンフラ町領主ウンダウミン			2															2
ウー・チンウー			11														7	18
ピンダー町領主ママブー			1															1
ウー・ダツ			1															1
サレーサヤジー・ウー・ボンニャ			1														73	74
サエジー・ウー・マウンガレー			1														26	27
キンウンミンジー			2		3												41	46
ウエツマッス郡長			6		6												16	28
シユエーダヨウウン				1														1
タウングー卿				2														2
ミン・バデータヤザー														4				4
ミン・ビョーチョー														1				1
マウンイー														1				1
メークエ														1				1
スィーパニー僧正															2			2
書記官ウー・チャン																	4	4
マウン・ルージー																	14	14
ポートゥードー・ウー・ミン																	2	2
タウンドゥインジー・ティッター																	1	1
詩人ウー・ミン																	6	6
御詩人ウー・ボウン																	3	3
詩人ウー・オー																	1	1
ウツミエーウン																	1	1
ターヤーワディー・ウー・ワイン																	14	14
シユエチン脚ウー・カイン																	1	1
ウー・ルン																	1	1
御詩人ウー・イ																	2	2
ザペーナゴー町行政官ウー・ポー																	2	2
マウン・サントツ																	4	4
マ・ソウン																	2	2
ウー・トー																	1	1
裁判官ウー・エー																	1	1
マウン・シユエウイン																	1	1
マウン・シンマウン																	1	1
ウー・シユエタウン																	9	9
作者未詳	220	10	17	30	10	1	1	0	0	0	2	0	1	0	1	2	41	336
作品数合計	256	64	187	52	33	10	8	16	4	6	4	1	2	7	3	2	291	946

[出典] 貝葉 [NL 3149] より筆者作成。



帆走歌, 歌, 主音回帰詩, 主音回帰四行詩, 両面太鼓歌, 御船歌, 八十音歌季節を詠んだもの, 芝居用の歌 (hlwin-than, te, tahpyan, thandauk, poungyi-than, hle-gyin, shithsepo radhi bhwe, zatlaik-than zu) [NL 3149: tii(k)].

図 20. 『著名歌謡作品全集』の11番目の項目

〔出典〕ミャンマー国立図書館所蔵貝葉 [NL 3149: tii(k)], 2004年12月1日筆者撮影。

は、<sup>レヤイ・タン</sup>憂奏歌、<sup>ミークエッカ・ジン</sup>燭台舞踊歌、<sup>デーケーリー</sup>歌謡 (注 83 参照) の三つある。表 7 からは、ジャンルの幅を示す横軸はウー・サによって広げられ、作者の幅を示す縦軸はパッピョーによって広げられていることを見て取ることができる。

## 7 「大歌謡の記録」[NL tin68]

この貝葉は表紙には何も記載されておらず、所蔵先のミャンマー国立図書館において「大歌謡の記録」という題名で整理されている。序文にも結語にも年代が書かれていないが、歌謡をジャンル名と共に掲載したものとして挙げたい。序文には次のようにあり、歌謡ジャンル名が挙げられている。

5種の楽器の音、弦、皮、吹奏、拍手、18芸<sup>72)</sup>のうちの一つである堅琴の技術を学びたい国民が学び見るために記録し書いたマウントゥエソーが書いた(不鮮明)弦歌、編み歌、承前歌、緩慢歌、<sup>デー・ボーレー</sup>夫哀歌、音の揃ったボウンピャンネーナ<sup>ヨーダヤー・タン</sup>ン(で歌詞が始まる作品)、<sup>アユタヤ</sup>歌、<sup>タライン</sup>族歌謡、<sup>カチン</sup>族歌謡、

<sup>ダウエー</sup>語歌謡、<sup>ダウエー</sup>地方歌謡、<sup>カラ</sup>インド歌謡、ミャンマー民族の歌謡 [NL tin68: ka(w)] (括弧内筆者)。

上の序文には、本章で見てきた貝葉において1870年以降に確認できる歌謡ジャンル名が記載されていることから、1870年以降に作成されたと考えられる。また、他の歌謡集では確認できない「インド歌謡」などのジャンル名も記載されている。これについては、どのような歌謡であるか確認できなかった。また、「ミャンマー民族の歌謡」という記載も、他の貝葉には見られないものである。

上の序文に続いて「タンタヤーテーシン」で歌詞が始まる弦歌が続く。後述する歌謡集『国家版大歌謡』での弦歌の記載順 [Ministry of Culture 1969: 1-5] と同様である。歌謡がジャンルごとに記載されているという点では、先に見た『大歌謡の世界』と『著名歌謡作品全集』と同様の編集がなされている。

以上のようにこれらの貝葉の検討を通じ、歌謡集の編集は、1870年の『歌謡題名数の御記録』以後、作品をジャンルごとに整理し記載するという方向に向かってきていること

72) 知識、慣習法の知識、計算能力など18の部門の能力のことで、そのうちの一つに「堅琴、笙など(で演奏される)詩歌の能力」が含まれる [Htun Myint 1997: 257] (括弧内筆者)。

が指摘できる。次章では、歌謡集刊本がどのように編集されているかを検討する。

## V. 歌謡集刊本

### 1 歌謡集刊本

現在、大歌謡として参照され、音楽を学ぶ際に用いられるものは、もっぱら刊本の歌謡集である。以下、歌謡集出版と関わりのある音楽保存の動きについてもあわせて、刊本について見ていく。

植民地時代以降、音楽保存の研究グループが複数結成されている。伝統音楽、芸術の保存・保護を目的として、愛国運動家として名高いディードウッ・ウー・バチョー (Didouk U Bha Cho 1893-1947) が音頭を取って結成・設立した音楽研究グループ、ミャンマー国家楽器音楽協会、マンドラレーの大歌謡大学グループなどがあった [Hla Htut 1996: 54]。1948年のビルマ独立後、マンドラレー大学のウー・チャンミヤ (U Chan Mya) とウー・マウンマウンティン (U Maung Maung Tin) が音楽の原典 (original musical sources) を調査したことをウィリアムソンが指摘している [Williamson 1975: 160, 2000: 36]。ここでの「音楽の原典」とは、貝葉と折り畳み写本のことと思われるが、その調査の中身については述べられていない。

歌詞の異本・演奏のバリエーションを持つビルマ音楽の演奏の多様性をひとつにまとめようとする動きは、先に見た最初の歌謡集刊本である『大歌謡の世界』(1881)においても進められていることがその序文の中で示されていたが、現在、大学などの公的な機関で使用されている形に国家によって統一化の道が作られたのが、1953年である。ピアノ奏者フラトゥッ (Sandaya Hsaya Hla Htut) は次のように述べている。

1953年、ミャンマーの音楽芸術の保存と昂揚において、非常に重要なひとつの大事業を、国家が大々的に行った。それは、大歌謡<sup>73)</sup>の歌詞、曲<sup>74)</sup>、テンポを一致させるための正しい演奏の形式の見本を作る大会議を行い、調整し合い、具体化したことである [Hla Htut 1996: 60]。

これまで見てきた通り、歌謡集編集の大きな意図のひとつは、異本の統一ということであったが、上の記述からは、1953年には国の事業として課題として掲げられたことが分かる。この前年の1952年には、文化省より、弦歌と編み歌合計3篇を五線譜に記載した楽譜 [Ministry of Culture 1952] が出版されている。翌年の1954年には、現在に至るまで芸能学校や文化大学で教科書とされている『国家版大歌謡』 [Ministry of Culture 1969 (1954)] が文化省より出版されている。

緬暦1242年(西暦1881年)から第二次世界大戦が始まるまでに、6種の歌謡集が出版されたとフラッシュエは述べ、『大歌謡の世界』、『トゥリヤ社の新大歌謡』、ウー・ピョウンチョー著『大歌謡大全』、『歌謡浄化の書・初版』、サヤー・ミヤイン (Hsaya Myain) 著『王宮の大歌謡集』、ディードウッ・ウー・バチョー<sup>75)</sup>が修正・編集した『歌謡浄化の書』を挙げている [Hla Shwe 1994: 33]。この6種以外にもこれまで歌謡集が出版されてきている。表8に筆者が確認した歌謡集刊本を示した。これらの歌謡集のうち、貝葉に基づいて編集されたことが分かるものについては書名の横に\*を記した。その他の刊本は、底本を明記していない。

表8に示したように、15種類の歌謡集が確認できる。表8に挙げた歌謡集の一部は版を重ねている。確認できた版年を表9に示した。

表9に示したように、1881年から1999年

73) 「マハーギーター・タチンジー」と、パーリ語とビルマ語を併記している。

74) 原語は「ティークエック (tiikwek)」。曲を構成する楽器の演奏部分。

75) 原文では「ディードウッ・サヤー・チョー (Didouk Hsaya Cho)」。「サヤー」は「先生」の意味。

表 8. 歌謡集刊本

	初版年	著者・書名・版	掲載作品数 <sup>76)</sup>
1	1880年	ウー・ヤウツ『大歌謡の世界』* (1893年版の貝葉写本あり)	193 <sup>77)</sup>
2	1922年	トゥリヤ出版社『新大歌謡』(第1刷)	244
3	1923年	マウンマウンラッ『歌謡浄化の書』(第1刷)	527
4	1923年	ウー・ピョウンチョー『大歌謡大全』(第1刷)	505
5	1931年	ピアノ奏者ミヤイン『王宮の大歌謡集』	561
6	1948年	ウー・ポーラッ『後に見つかった古い大歌謡』(ミインダー Myindha 村 <sup>78)</sup> 僧院の折り畳み写本より収集)*	35
7	1954年	文化省『国家版大歌謡 第1巻』	169
8	1956年	文化省『国家版大歌謡 第2巻』	
9	1961年	文化省『国家版大歌謡 第3巻』	
10	1967年	ズエーサーベー出版社『マハーティーリゼーヤトウラ・ミャワ ディ 卿ウー・サのミャワディ文集と歌謡集』(以下『ウー・サの文集と歌謡集』)*	173 <sup>79)</sup>
11	1968年	ペールワ・サヤー・ティン『歌謡学の基礎』	763
12	1969年	文化省『国家版大歌謡 (第1, 2, 3巻合本)』(第2刷)	169
13	1975年	オウンキン他『王宮用大歌謡集』(第1刷)	793
14	1986年	マナワ『大歌謡大全』(第1刷)	861
15	1999年	ミインチ編, ウェッマスッ郡長『著名歌謡作品全集』*	946

【出典】筆者作成。

にかけて、数年から数十年おきに新しい歌謡集が出版され、そのうち『新大歌謡』、『歌謡浄化の書』、『大歌謡大全』、『国家版大歌謡』の4点は、版を重ねていることが分かる。

ウィリアムソンによると、1960年代にマンダレーの音楽・芝居の国立学校で広く使用された公式な歌謡集は、1923年にヤンゴンで出版された『歌謡浄化の書』である [Williamson 2000: 36]。この歌謡集は、最後の宮廷堅琴奏者であるデイワエインダ・ウー・マウンマウンジー (Deiwa einda U Maung Maung Gyi 1855-1933) の生存中に彼のレパートリーを、彼の献身的な弟子で

ある堅琴奏者ウー・マウンマウンラッ (U Maung Maung Lat) が集めたものに基づき、後にディードウツ・ウー・パチョーが1935年に加筆修正を行って編集したものである [Williamson 2000: 36-37]。ガーフィアスは1975年の論文中で、『大歌謡』<sup>80)</sup>と『歌謡浄化の書』が主な歌謡集であり、この二つの文献にある歌謡がプロの音楽家によって古典音楽の主要なものと見なされてきたと述べている [Garfias 1975a: 4]。近年では『国家版大歌謡』が公的なテキストとしての位置を占めるようになっていく。表8と表9に示したように、これは1954年から1961にかけ

76) 同一の題名でひと続きの作品の中には、複数の作品として分けて数えられるものもあり、ここでは筆者の判断で別作品と数えたものを1篇とした。従って、数え方によっては作品数は前後する。

77) 貝葉の『大歌謡の世界』と作品数が一致していないのは、貝葉と部分的な異同(頁の有無等)があるためである。

78) チャウセーから西方に4マイルほどの村。

79) この刊本中では173の作品に分けられているが、さらにそれぞれの作品が複数の作品に分けられて別々に演奏されているものもあり、数え方により作品数はこれより多くなる。

80) 『大歌謡大全』 [Pyone Cho 1968] のことを指すと考えられる。



表 10. 『国家版大歌謡』の構成

作者名	ジャンル										合計			
	弦歌	編み歌	承前歌	パッピョー	アユタヤ歌	モン歌謡	四穴音付着歌	馬術歌	釈尊賛歌	カレン族歌謡		夫哀歌	重疊歌	八十音歌
ウー・サ	10	2	4	15	6	1	1							39
パデータヤーザー	6		1											7
レウウェーノーヤター	2													2
王子マウンコウッテー	1													1
ピンズィ王子	2			3	11									16
タヨウウッウン	2		1											3
ウー・ルンベー	3													3
メーロウツ	1		1	1										3
ウー・バガレー		1												1
ンゲートーウン			1	3										4
シンルイン			1											1
シンワラ			1											1
ゼーヤパテ貴族			1											1
ウー・ミアウン			1											1
ビャーティーサー村領主ウー・ルンベー			1											1
フラインティッカウンティン				2						1				3
ウー・マウンガレー				1										1
ミングン王子				1										1
ウー・ネーウー				1										1
マミヤガレー				2										2
ビー・ミン				1										1
ターヤーワディー・ウー・ワイン				2						1				3
ウー・チャウケー				3										3
大臣夫人キンソウン				1										1
パカン王子				1										1
ウー・タウンボー					1									1
ウエツマスツ郡長					1									1
スィングー王の王妃メーミン											1			1
ウー・ボンニャ													1	1
作者未詳	18	6	1	10	16	6	2	1	1	1	2			64
総作品数	45	9	14	47	35	7	3	1	1	2	3	1	1	169

【出典】『国家版大歌謡』<sup>マハ・パター</sup> [Ministry of Culture 1969] より筆者作成。

いるものは7点、「大歌謡（タチンジー）」と記載されているものは1点、「歌謡（ギター）」と記載されているものが3点ある。これら

の名称のもとに、歌謡作品群が包括されているといえる。そして、いずれの歌謡集刊本も、作品をジャンルごとに掲載している。

表 11. 歌謡集の構成

歌謡集		『歌謡題名数の御記録』 (1870)	『大歌謡の世界』 (1881)	『著名歌謡作品全集』 (1917)	『国家版大歌謡』 (1969)
ジャンル	1	弦歌	弦歌	弦歌	弦歌
	2	編み歌	編み歌	編み歌	編み歌
	3	承前歌	承前歌	承前歌	承前歌
	4	—	鼓承前歌	鼓承前歌*	鼓承前歌*
	5	パッピョー	パッピョー	パッピョー	パッピョー
	6	アユタヤ歌	アユタヤ歌	アユタヤ歌	アユタヤ歌
	7	タライン族歌謡	モン歌謡	モン歌謡	モン歌謡
	8	テインガー氏歌謡	テインガー氏歌謡	テインガー氏歌謡	—
	9	重畳歌	重畳歌	—	重畳歌
	10	四穴音付着歌	—	四穴音付着歌	四穴音付着歌
	11	ダウエー語歌謡	—	ダウエー語歌謡	—
	12	夫哀歌	—	—	夫哀歌
	13	馬術弦歌	—	—	馬術歌
	14	釈尊賛歌	—	—	釈尊賛歌
	15	主音回帰四行詩	—	主音回帰四行詩	—
	16	—	—	八十音歌	八十音歌
	17	ダウエー地方歌謡	—	—	—
	18	変わり歌・緩慢歌	—	—	—
	19	緩慢歌	—	—	—
	20	変わり夫哀歌	—	—	—
	21	精霊を招く四音朗詠詩	—	—	—
	22	精霊を招く弦歌	—	—	—
	23	精霊をなだめる歌	—	—	—
	24	歌声のよい精霊歌	—	—	—
	25	季節詩	—	—	—
	26	一個の石の歌	—	—	—
	27	大笛の歌	—	—	—
	28	大歌	—	—	—
	29	四音朗詠詩	—	—	—
	30	—	—	憂奏歌 <sup>82)</sup>	—
	31	—	—	燭台舞蹈歌	—
	32	—	—	デーケーリー <sup>83)</sup> 歌謡	—
	33	—	—	緩慢歌	—
	34	—	—	合唱歌	—
	35	—	—	夜乗り歌	—
	36	—	—	哀歌	—
	37	—	—	帆走歌	—
	38	—	—	歌	—
	39	—	—	主音回帰詩	—
	40	—	—	両面太鼓歌	—
	41	—	—	御船歌	—
	42	—	—	芝居用の歌	—
	43	—	—	—	カレン族歌謡

[出典] 貝葉 [NL barnard1076], [UCL pe11170], [NL 3149], 刊本『国家版大歌謡』 [Ministry of Culture 1969] より筆者作成。

## 2 歌謡集刊本の構成

歌謡集の刊本のうち、『国家版大歌謡』を取り上げ、その構成を見つめる。先にも述べたように、この刊本は、歌謡集の中で最も整理され、各界の識者によって議論を重ねられた結果作られた国家版として位置づけられている。この歌謡集の構成を表10に示した。

表10に示したように、『国家版大歌謡』においても、先に見た『大歌謡の世界』、『著名歌謡作品全集』と同様、弦歌とパッピョーに属する作品が多く、全体の54%を占めている。作者が最も多いのはやはりパッピョーで、パッピョーの作者数は14名である。また、作者個人が手がけているジャンルの数ではウー・サが7種であり、これまで見てきた歌謡集と同様にここでもウー・サが最も多い。作者の中で作品数が最も多いのもウー・サで、彼の作品が全体の23%を占めている。

以上、貝葉及び刊本の歌謡集について見てきた中で、1870年に『歌謡題名数の御記録』において歌謡ジャンル名の区分がはっきりと確認できて以降の貝葉である『大歌謡の世界』(1881)、『著名歌謡作品全集』(1917)及び刊本の代表として取り上げた『国家版大歌謡』(1969)において、歌謡がジャンルごとに掲載されていることが分かった。この4点の歌謡集に掲載されたジャンル名を表11に示した。鼓承前歌(表中\*印の箇所)は『著名歌謡作品全集』と『国家版大歌謡』では

「承前歌」の項目に入れているが、作品名には「承前歌」と記載されず、「鼓承前歌」と記載されているので、ここではジャンル名として記載した。

表11を見ると、ジャンル名は合計43あり、4点の歌謡集で共通しているジャンルは弦歌、編み歌、承前歌、パッピョー、アユタヤ歌、モン歌謡の六つである<sup>84)</sup>。『歌謡題名数の御記録』中の「タライン族歌謡」の「タライン族」は「モン族」の旧称で、「モン歌謡」と同じジャンルを指す。この六つのジャンルと鼓承前歌を合わせた作品数のそれぞれの歌謡集における割合は、『歌謡題名数の御記録』で48%、『大歌謡の世界』で96%、『著名歌謡作品全集』で63%、『国家版大歌謡』で92%であり、歌謡集のほとんどがこれらのジャンルで占められているといえよう。そして、その他のジャンルは歌謡集間でかなり異なる。それらのジャンルは作品数も少なく、先の大多数のジャンルが「主要」と位置づけるとすると、「小さな」ジャンルと位置づけられよう。たとえば、『歌謡題名数の御記録』と『国家版大歌謡』に掲載されている「馬術弦歌」と「馬術歌」というジャンルは同じものであるが、これの演奏形式は弦歌として演奏される曲と同じである。演奏される場が、馬術を競う式典であるために「馬術弦歌」または「馬術歌」と呼ばれて、弦歌から細分化されたものと位置づけること

82) 表紙と本文中では綴りが異なり、表紙は「le.yaikthan လဲယိက်ထံ」,本文中では発音は同じだが「le.yaikthan လဲယိက်ထံ」と綴られている[NL 3149: Daa:(k)-Dhu(k)].音楽事典などでも言及されていないジャンルであり形式も不明である。

83) この名称の曲は1曲しか見つからず、また語源も不明であった。しかし、同じく『著名音楽作品全集』に掲載されているパッピョー「女性を詠んだデーケーリー歌謡・パッピョー」[NL 3149: san(w)]と歌詞が全く同じであるので、パッピョーを細分化したものではないかと思われる。

84) コックス(Sherry Lee Cox)は、「1700年代の後半、バジードー王の宮廷堅琴奏者ミャワディ・ウー・サが『マハーギータ』として知られるようになった古い歌を収集した。それ以降、『大歌謡解説(Maha Gi-ta. Ahpwin)』、『歌謡浄化の書(Gi-ta. Wi. dhaw. Dani. Jan:)』、『大歌謡大全(Maha Gi-ta. Paun: Hcou' Ji:)』、『歌謡研究(Gi-ta. Dhu-Tei-Tana)』(筆者はこの歌謡集を確認できなかった)、『国家版大歌謡(Nain-Ngan-Daw-Mu Maha Gi-ta.)』というタイトルのもとに印刷された古い歌の多くの版が出されてきた」と述べる[Cox 1985: 25](書名の括弧内表記は原文通り)。コックスは、以上の刊本について、いずれの文献にも掲載されているのは弦歌、編み歌、承前歌、パッピョー、アユタヤ歌、モン歌謡の六つの区分(classifications)であり、さらにそれぞれその他の歌謡の区分も掲載していると述べている[Cox 1985: 25]。

ができる。つまり、ジャンル区分の基準は、いずれのジャンルにおいても共通しているわけではなく、主要なジャンルから内容や演奏の場に基づいて細分化されたジャンルもあることが分かる。そのようなジャンルや、作品数が少ないジャンルは、歌謡集において記載されたりされなかったりすることが指摘できる。歌謡集によって作品がどのジャンルに帰属させられるかは、その作品が以後の歌謡集において掲載されるかされないかの可能性にも関係するといえよう。

## VI. 結論

本稿では、歌謡集が編集されてきた過程を検討し、大歌謡と呼ばれる歌謡作品群がいくつかの歌謡ジャンルに分けて整理されるようになった過程を明らかにしてきた。

現在では、古典歌謡として認識されている作品群は、大歌謡と総称され、大歌謡は複数のジャンルから成るものとして認識されていることをまず確認した。大歌謡という言葉は1881年に現れたことが指摘されていたが、ジャンル区分についてはいつ頃からなされるようになったのかは明らかにされていなかった。

従来の研究においてほとんど使用されてこなかった1920年代以前の一次資料、とくに貝葉を検討することによって、歌謡作品群の整理と記録がいくつかの段階を踏んでなされてきたことが分かった。そして、1870年の『歌謡題名数の御記録』以前と以後で、歌謡集の形に大きな変化があることが指摘できた。1870年以前の歌謡集においては、古い作品として伝えられている歌謡、精霊歌のように特定の儀礼に関した歌謡、あるいは、ある個人の作った歌謡がひとつの歌謡集として編集されており、歌謡作品群を全体として包括する形の歌謡集は作成されていなかった。また、個々の作品にジャンル名が記載されているわけでもなかった。

1870年の『歌謡題名数の御記録』におい

て、歌謡作品が目録化されたことは、後の大歌謡という作品群の認識の基礎になったと考えられる。1849年の『ウー・サの文集と歌謡集』の編集を命じたのも、『歌謡題名数の御記録』の編集を命じたのも、ミンドン王であった。ミンドン王が編集を命じた両貝葉に挟まれた1849年から1870年の期間に、歌謡作品がひとつの総体として認識されたと推察できる。また、『歌謡題名数の御記録』では、『ウー・サの文集と歌謡集』には記載されていないパッピーというジャンル名も記載されており、全ての作品がジャンルごとに目録化されていたことから、作品をいずれかのジャンルに帰属するものとする認識が確立していたことが分かる。

その後の歌謡集である『大歌謡の世界』<sup>マハーギータ</sup> (1881年) や『著名歌謡作品全集』(写本年1917年) では、『歌謡題名数の御記録』と同様の構成でもってジャンルごとに作品が整理されている。その後、1920年代以降に歌謡集の刊本が盛んに作られたが、それらの構成はこの2点の貝葉の構成をほぼ踏襲している。

歌謡の全体像を包括する言葉である大歌謡という言葉が1881年の『大歌謡の世界』<sup>マハーギータ</sup> で現れた後、その後しばらくは、新しく作られた歌謡作品をも含んでいった。1900年代初頭まで、新しく作られた作品の一部が歌謡集に収められ、現在、大歌謡の作品として演奏されているものもある。しかし、歌謡集が刊行される度に大歌謡の範囲は固定化し、新しく作られる大歌謡形式の作品は大歌謡の中には含められなくなっていった。1960年代以降は国家によって、さらに作品を取捨選択し異本の統一を目指した『国家版大歌謡』<sup>マハーギータ</sup> が編集され、これが現在、文化大学や芸能コンクールなどで使用される公定テキストとなることで、大歌謡の範囲ははっきりと定められたといえる。

以上、歌謡が記録される過程を追った中で、歌謡集の中でなされていたジャンル区分を見ると、弦歌やパッピーなどの、作品数が圧

倒的に多く、どの歌謡集にも掲載されている「主要な」ジャンルと、歌謡集によっては掲載されていない場合もある、主要なジャンルから細分化されたジャンルや作品数の少ない小規模なジャンルのような「小さな」ジャンルとの二種類に分けることができた。このことから、ジャンル区分が、一定の基準によってなされたわけではないこと、主要なジャンルが認識され区分されることによって、そこから排除される形でジャンル名を付されたものがあるのではないかということが推察される。また、歌謡集によっては、「小さな」ジャンルは記載されない場合があることから、このようなジャンルに帰属するものとしていずれかの歌謡集で分類されることによって、後の歌謡集に含められなくなってしまった作品があることも考えられる。

一方、作者に注目すると、『歌謡題名数の御記録』(1870年)には作者名は記載されていないが、『大歌謡の世界』(1881年)以後の歌謡集において、ウー・サの作品が作品数において他の作者を圧倒して比重が大きく、歌謡のジャンル数も、ウー・サによって広げられていた。このことに基づくと、ウー・サが後に様々なジャンルに分類されることになった多様な作品を大量に作ったことが、逆に歌謡作品群をひとつの総体としてまとめる認識を引き起こしたという仮説を立てることができるのではないだろうか。

また、ジャンルは演奏形式の解釈の方法であると筆者は考えており、現在でもどのジャンルに属するかはっきりしない作品があることから、本来、個々の作品とその演奏形式の関係は自由であったのではないかという仮説を筆者は立てている。歌謡集の中で個々の作

品が特定のジャンルに帰属するものとして分類されていくことによって、個々の作品の演奏形式が固定化してしまい、そのことがさらに、ジャンル区分を疑う余地のないものとして認識させていくことになったのではないか。今後は、個々の作品とその演奏形式の分析を加え、以上の問題と仮説について検証していくことを課題としたい。

## 参考文献<sup>85)</sup>

### 1. 未公開資料<sup>86)</sup>

貝葉

請求番号 編者、写本年(原本年)、写本名

NL 3149. Monywa hsayadaw. 1917/18. *Monywe hsayadaw she ti-gyek than-zu* မုံရွာဆရာတော်ရေးတီးချက်သံစု (モンユエー僧正の古い楽曲集/ハータザワニカニャーナミンザリ・チャン).

NL 3149. Wetmasut wundaok. 1917. *Thabba gitekkama pakathani gyan* သဗ္ဗဝိတေတ္ထမဝကထာနိဂုံး (著名歌謡作品全集).

NL barnard603.

n.w. 1869. *Hsehna-yadhi e-gyin* ဟဲရှာသီခဲချင်း (12の季節の合唱歌).

NL barnard1076.

n.w. 1870. *Thachin ghaunzin pouk-yei hmat-su-daw* သီချင်းခေါင်းစဉ်ပုဒ်ရေမှတ်စုတော်<sup>87)</sup> (歌謡題名数の御記録).

NL barnard1604.

Sa, U. 1876. *Myawadi myoza wungyi shinlin thout-thin hta dhi thounze-hkuna min nat-tan, Wungyi Padethayaza hso thounze-hkuna min nat-tan* မြဝတီမြို့စားဝန်ကြီးရှင်းလင်းသုတ်သင် ထားသည့်ဂူမင်းနတ်သံ။ ဝန်ကြီးပဒေသရာဇာဆိုဂူမင်းနတ်သံ (ミヤワディ町領主大臣が整理した37精霊の歌. ウンジー・パデータヤザーの詠んだ37精霊の歌)

NL tin68.

n.w. n.d. *Thachingyi hmat-su* သီချင်းကြီးမှတ်စု (大歌謡の記録).

NL tin69 Sa, U. n.d. *Thounze-hkuna min nat-tan*

85) ビルマ人名については、文献に掲載されている通りに敬称等を記した。本文での引用の際は同名の筆者がいる場合を除き、敬称を省略した。本稿では、ビルマ語の転写は、人名転写に使用される方式を用いた。

86) 請求番号の冒頭の略号は筆者による。以下の通り、それぞれ所在先図書館もしくは所有者を示す。HL: National Library, UCL: Universities Central Library, UHRC: Universities Historical Research Centre, UKMT: U Khin Maung Tin 氏所蔵。

87) 後から、所有者のウー・キンマウンティン (U Khin Maung Tin) 氏が記入したもの。

*thachin* ဥဂမင်းနတ်သံသီချင်း (37 精霊の歌).  
 NL kin351  
 Sa, U. n.d. *Myawadi mingyi, min-ahse hset yei-tha hsethwin-dhi sa-zu* မြဝတီမင်းကြီး ။မင်းအဆက်ဆက် ရေးသားဆက်သွင်းသည့်စာစု (ミヤワディ 卿が歴代の王に書き贈った文集).  
 NL taung620  
 n.w. 1822. *An-gyin-mya* အန်ချင်းများ (筏乗り歌).  
 NL taung1773  
 n.w. n.d. *Nat-chin* နတ်ချင်း (ရည်းစားဘွဲ့ဂုဏ်) (精霊の歌).  
 UCL pe11170  
 Sa, U. 1893. *Thounze-hkuna min nat-hnyun nat-than* ဥဂမင်းနတ်ညွန့်နတ်သံ (37 精霊を指示する精霊歌).  
 UCL pe11170  
 n.w. 1893. *Maha gita meidani gyan* မဟာဝိတမေဒဏီကျမ်း (大歌謡の世界).  
 UCL pe42332  
 Sa, U. 1902 *Myawadi mingyi thachin luta yadu zat-zaga zu* မြဝတီမင်းကြီးသီချင်းလုံးတား ဂုဏ်ဇာတ်စကားစု (ミヤワディ 卿の歌謡, 四音朗詠詩, 季節詩, 戯曲の台詞集).  
 UHRC 465.  
 Sa, U. 1883/84. *no title* (*Myawadi mingyi sa-zu* မြဝတီမင်းကြီးစာစု မိယာဝဒီ 卿文集).  
 UKMT pe1  
 n.w. n.d. (弦歌).  
 UKMT pe2  
 n.w. n.d. *Pathama, thachingan-gyi, thachingan-lat, thachingan-nge, nat-thachingan, hmat-su-daw* ပဌမ။သီချင်းခံကြီး။ သီချင်းခံလတ် သီချင်းခံဝယ်။နတ်သီချင်းခံ။ပုတ်စုတော် (第一卷, 大承前歌, 中承前歌, 小承前歌, 精霊承前歌の記録).  
 UKMT pe3  
 n.w. n.d. *Awa min lettek yei, may-bhwe thachingan-gyi paya* အဝမင်းလွှက်ရေ။မယ်ဘွဲ့သီချင်းခံ<sup>38)</sup> ကြီးဘုရား (インワ王時代に書かれた女性を思う大承前歌).  
 折り畳み写本  
 NL pu97. *Thachingan gyi parabaik* သီချင်းခံကြီးစုပုဂ္ဂိုလ် (大承前歌集).  
 NL pu101.  
*Thounze-hkuna min nat-than* ဥဂ-မင်းနတ်သံ (37 精霊の歌).  
 NL pu103.  
*Ayatyat thachingyi parabaik paya* အရပ်ရပ်

သီချင်းကြီးပုဂ္ဂိုလ်ဘုရား (諸々の大歌謡の折り畳み写本).  
 NL pu104.  
*Ayatyat thachingan-gyi-zu* အရပ်ရပ်သီချင်းခံကြီးစု (諸々の大承前歌集).  
 NL pu112.  
*Thami-daw myat yadana mya-pahket-daw tin mingala luta, hlwe-gyin, yodaya-kyethwa, tei, phoun-bhwe myo-zoun paya* သမီးတော်မြတ်ဂုဏ်နာဂြုဏ်တော်တင်မင်္ဂလာလုံးတား။လွဲချင်း။ယိုးဒယားကြေးသွား။တေး။ဘုန်းဘွဲ့မျိုးစုံဘုရား (王女をエメラルドの揺り籠に乗せる吉祥の四音朗詠詩, 王宮揺り籠歌, 銅鼓アユタヤ歌, 威徳を詠んだ歌各種).  
 NL pu119.  
*Wunshindaw Myawadi myoza mingyi, ayatyat sigoun rei-tha dhi thachin parabaik paya* ဝန်ရှင်တော်မြဝတီမြို့စားမင်းကြီး။အရပ်ရပ်စီတန်းရေးသားသည်။သီခြင်းပုဂ္ဂိုလ်ဘုရား။ (軍司令官ミヤワディ 卿が詠んだ諸々の歌謡の折り畳み写本).  
 NL pu128.  
*Weithandaya cho hlei-gyin* ဝေသန္တရာချိုးလှေချင်း (ウェータンダヤー舟歌).  
 NL pu129.  
*Hlei-gyin zu* လှေချင်းစု (舟歌集).  
 NL pu142.  
*Taung loung hmaing hle-daw ahmudhan do pei-at yan tek thachin paya* တောင်လုံးပိုင်းလှေတော်အမှုထမ်းတို့ပေးအပ်ရန်တက်သီချင်းဘုရား (タウンロウンフマイン御舟官吏らに与えた歌謡).  
 NL pu144.  
*Mingyidaw, ngeto atwinwoun, U Waing do hso patpyo, kayin-o hleitek-hsan-than* မင်းကြီးတော်။ငယ်တိုးအတွင်းဝန်။ပိုးဝိုင်းတို့ဆိုပတ်မျိုး။ တရင်သြလှေတက်ဆတ်သံ (大臣, シゲートー 枢密官, ウー・ワインらの詠んだパッピョー, カレン族歌謡, 御船歌).  
 NL pu168.  
*Ayakyak thachingan-gyi parabaik paya* အရပ်ရပ်သီချင်းခံကြီးပုဂ္ဂိုလ်ဘုရား (諸々の承前歌の折り畳み写本).  
 NL pu922.  
*Myawadi myoza wungyi hso, thounze-hkuna min nat-than* မြဝတီမြို့စားဝန်ကြီးဆို။ ဥဂမင်းနတ်သံ (ミヤワディ 町領主 卿の詠んだ 37 精霊の歌). 表紙のみ.  
 UCL pbk0577.  
*Yadu lutha lokanat tya-tyan tei-than thachin* ဂုဏ်လုံးတားလော်ကနတ်ဘုရားသံသီခြင်း။<sup>89)</sup>

88) 「thachingan-gyiသီချင်းခံကြီး」の「gan ခံ」の箇所綴り不鮮明。  
 89) 表題が後からペンで記載されている様子。

(季節詩，四音朗詠詩，釈尊賛歌などの歌謡)。

UKMT pu221

*Patpyo 16, tei-twe, yodaya, teinga-than, hlei-than, suzu-pouk-ye 25* ဝတ်ပျိုးဝါးဝါးတေးဝဲတူးဝါးဒါဝါ (不鮮明)။ ဝတ်ပျိုးဝါးဝါး (不鮮明)။ လှေသံပျိုးဝါးဝါး (パッピョー 16, 緩慢歌 1, アユタヤ歌 1, ダウエー語歌謡 2, テインガー氏歌謡 1, 御船歌 2)。

UKMT pu222

*Athi ahmouk thinkya-yo, kyo, bhwe, thachinghan haung zu paya* အတီးအမှုတ်သင်ကြားရိုးကြိုးတို့သီချင်းခံဟောင်းစုတရား (伝統的に教授する演奏。古い弦歌，編み歌，承前歌集)。

UKMT pu 223

*Thachingyi mya* သီချင်းကြီးများ (大歌謡)。

UKMT pu765

no title (後乗り歌他掲載)。

UKMT pu775

*Patpyo thachin* ဝတ်ပျိုးသီချင်း (パッピョー歌謡)。

手稿

NL no number.

Monywe Hsayadaw. 1974?. *Hatha zawanikanyana minzari gyan* ဟာသဝေန်တကတမ္ပရိကျမ်း (モンユエー僧正の古い楽曲集／ハータザワニカニャーナミンザリ・チャン)。

NL no number

n.d. *Thabba gitekkama pakathani gyan* သဗ္ဗဝိတက္ကမဝကာသနီကျမ်း (著名歌謡作品全集)。

2. 公刊資料

Ba Cho, Didout U. 1967 (5th ed.). *Gita witho dhani gyan* ဝိတဝိသောဝေန်ကျမ်း (歌謡浄化の書)。Yangon: Gandama Press.

Hpo Lat, U. 1948. *Nauk twe shei thachingyi mya* နောက်တွေ့ရေးသီခြင်းကြီးများ (後に見つかった古い大歌謡)。Yangon: Sekyawala Press.

Khin Aye, U. ed. 1993 (rep). *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 4. (ミャンマー文学集第 4 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

Manawa. 1986. *Maha gita paung-gyou-kyi* မဟာဝိတပေါင်းချုပ်ကြီး (大歌謡大全)。Yangon: Hnaloun hla Press.

Maung Maung Lat. 1994 (6th ed.). *Gita witho dhani gyan* ဝိတဝိသောဝေန်ကျမ်း (歌謡浄化の書)。Yangon: Didouk Press.

Ministry of Culture. 1969 (2nd ed.), 1986, 1995 (4th ed.), 1997 (5th ed.). *Naing-gan-daw mu*

*maha gita* မိုင်းတော်မူမဟာဝိတ (国家版大歌謡)。Yangon: Ministry of Culture.

Myain, Sandaya Hsaya. 1931. *Shwenan htwek mahagita chan-gyi* ရွှေနန်းထွတ်မဟာဝိတကျမ်းကြီး (王宮の大歌謡集)。Yangon. Pale Myain Press. Myint Kyi. ed. 1992a (3rd ed.). *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 1. (ミャンマー文学集第 1 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

——— 1992 b (2nd ed.). *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 2. (ミャンマー文学集第 2 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

——— 1999. *Thabba gitekkama pakathani gyan* သဗ္ဗဝိတက္ကမဝကာသနီကျမ်း (著名歌謡作品全集)。Yangon: Ministry of Culture.

Myint Than, Daw. ed. 1992 (3rd ed.). *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 3. (ミャンマー文学集第 3 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

Ohn Hkin, U. eds. 1975. *Shwenan thoung maha gita paung-gyouk* ရွှေနန်းသုံးမဟာဝိတပေါင်းချုပ် (王宮用大歌謡)。Yangon: U Hla Hkin - Hsan Nyun U saouk taik.

Po, Daw. ed. 1993a (4th ed.). *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 5. (ミャンマー文学集第 5 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

——— 1993b. *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 6. (ミャンマー文学集第 6 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

——— 1993c. *Myanma sanyun baung gyan* မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း vol. 7. (ミャンマー文学集第 7 卷)。Yangon: Myanma alin dhadin-za taik hnin gadiyan dhadin-za sadaik.

Pyone Cho, U. 1968 (6th ed.), 1977 (7th ed.). *Maha gita paung-gyouk-kyi* မဟာဝိတပေါင်းချုပ်ကြီး (大歌謡大全)。Yangon: Pinya alin pya Press.

Thuriya Press. 1923 (2nd ed.). *Maha gita athit* မဟာဝိတအသပ် (新大歌謡)。Yangon: Thuriya Athin Sataik Limit.

Tin, Beluwa Hsaya. 1968. *Gita lingaya dipani hko gita theippan achegan* ဝိတလင်္ကာရဒီပနီဝေါဝိတသိဝံအခြေခံ (歌謡韻文解説書，歌謡学の基礎)。Yangon: U Mya Ohn Press.

Yauk, Sheinei U. n.d. *Maha gita meidani gyan* မဟာဝိတမေဒဏီကျမ်း (大歌謡の世界)。Yangon: Union of Myanmar Press, workers Press.

Zwe Sape Press. 1967. *Maha thiri zeiya thura Myawadi mingyi U Sa i Myawadi sa-zu hnin thachin-zu* မဟာသီရိဓေယျရမြဝတီမင်းကြီးဦးစစ်မြဝတီစာစုနှင့်သီချင်းစု (マハーティーリゼーヤトウラ・ミヤワディ 卿ウー・サのミヤワディ文集

と歌謡集). Yangon: Zwe sape Press

### 3. 引用文献

#### (1) ビルマ語

- Burma Translation Society (Myanma Naingan Hbadhapyan Sape Athin) (BTS). 1966. *Myanma swezoun gyan* မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း (ミャンマー百科事典) vol. 10. Yangon: Sape Beiman.
- Hla Htut, Sandaya. 1996. *Myanma gita ye-si-gyauung* မြန်မာဂီတရေးစီးရောင်း (ミャンマー音楽の流れ). Yangon: Ne Yi Oo Press.
- Hla Shwe, Sagaing. 1994. *Maha gita* မဟာဂီတ (大歌謡). Yangon: Sapei Beiman.
- Houk Sein, U. 1978. *Amya-thoung Myanma-Ingaleik-Pali-abhidhan* အများသုံးမြန်မာ-အင်္ဂလိပ်-ပါဠိ-အဘိဓာန် *The Universal Burmese-English-Pali Dictionary*. Yangon: U Hoke Sein.
- Htun Myint, Dagon U. ed. 1997. *Thuhka hmat-su* ထုခမုတ်စု (トウカの覚書) Yangon: Tetlan Sapei.
- Khin Maung Nyunt. n.d. *Myanma gita wohara abhidhan* မြန်မာဂီတဝေါဟာရအဘိဓာန် (ミャンマー音楽用語事典). n.p.
- Maung Kyi Shin. 1968. *Maha gita pyazat* မဟာဂီတပြဇာတ် (大歌謡戯曲). Yangon: Aung Myo Nyunt Sapei.
- Maung Maung Tin, U (Wundauk Min). 2004 (1905). *Koung-bhaung zet maha yazawin-dawgyi* ကုန်းဘောင်ဆက်မဟာရာဇဝင်တော်ကြီး (vol. 3) (コンバウン王統史第3巻). Yangon: U Bha Thaug.
- Ministry of Culture. 1952. *Shei-yo myanma pantya* ရေးချီးမြန်မာပန်ကျာ *Classical Burmese Music*. Yangon: n.publication.
- . 2001. *Myanma anuthukuma abhidhan* မြန်မာအနုထုခုမအဘိဓာန် *Dictionary of Myanma Performing and Plastic Arts*. Yangon Myitta Press.
- Myint Kyi, U. 1960. *Myanma tei-gita anu sapei thamain* မြန်မာတေးဂီတအနုစာပေသမိုင်း (ミャンマー歌謡芸術文学の歴史). Master's Thesis, Yangon University.
- . 2001. *Myanma tei-gita anu sapei thamain* မြန်မာတေးဂီတအနုစာပေသမိုင်း (ミャンマー歌謡芸術文学の歴史). Yangon: Ministry of Education.
- Nan Nyunt Swe. n.d. *Anupyinya aman* အနုပညာအားမာန် (芸術の誇り). Yangon: Gabha Loun Sapei.
- Saw Mya E Kyi, Daw. 1968. *Gita hmin aka* ဂီတနှင့်အတူ (音楽と舞踊). Yangon: Sapei Beiman.
- Thein Hlain, U. 2000. *Hkit-haung Myanma thamain thuteidhana abhidhan* ခေတ်ဟောင်းမြန်မာသမိုင်းသူတေသနအဘိဓာန် (過去のミャンマー歴史研究事典). Yangon. Universities Press
- Tin, Beluwa Hsaya. 1967. *Thachin yei ni lan-nyunt* သီချင်းရေးနည်းလမ်းညွှန် (歌謡の書き方入門).

Yangon: Pinya Sape-taik.

#### (2) 英文

- Becker, Judith. 1968. "Modes and the Oral Tradition in Burmese Music", Master of Arts, University of Michigan.
- . 1969. "The Anatomy of Mode", *Ethnomusicology*, Vol. 13, No. 2. (5, 1969): 267-279.
- Cox, Sherry Lee. 1985. "A Burmese Classical Song: Text-Music Relationships in the 'You: daya' Song 'Mya. Man: Gi-ri.'" M.A., University of Hawaii.
- Garfias, Robert. 1975a. "A musical visit to Burma". *The World of Music* XVII (1): 3-13.
- . 1975b. "Preliminary Thoughts on Burmese Modes". *Asian Music* VII (1): 39-49.
- Garfias, Robert/Becker, Judith/Williamson, Muriel C. 1980. "Burma". in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 3. Stanley Sadie ed. London: Macmillian Publishers Ltd.
- Keeler, Ward. 1998. "Burma". in *The Garland Encyclopedia of World Music Volume 4, Southeast Asia*. Terry Miller and Sean William eds: 363-400. New York: Garland Publishing.
- Williamson, Muriel C. 1975. "Aspects of Traditional Style Maintained in Burma's First 13 Kyo Songs". *Selected Reprts in Ethnomusicology* Volume II, No. 2. The Regents of the University of California: 117-163.
- . 2000. *The Burmese Harp, its Classical Music, Tunings, and Modes*. Northern Illinois University Monograph Series on Southeast Asia Number 1. Dekalb Illinois: Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University.

#### (3) 和文

- 大野 徹 2000. 『ビルマ (ミャンマー) 語辞典』 東京：大学書林.
- ペーマウンティン, ウー (大野徹監訳) 1992. 『ビルマ文学史』 東京：勁草書房.
- 山口 修, 徳丸吉彦 1992. 『地球の音楽 52 ミャンマー ヤンゴンとマンダレーの古典音楽 器の音, そして声』 日本ビクター株式会社.

原稿受理日—2007年3月30日

掲載決定日—2007年7月25日